仁　仁義禮智
中　誠　忠信　忠恕　恭敬
稚

訓幼字義　二

仁3
937
2

D 13

訓初字義巻之三

仁　凡二十八則

仁といふハ慈悲情関の深ひろく物に及ぶ。内外遠近行ひ
たらぬといふことなきをいふ。しかれども天下の事は万善の惣括。
人の須臾もはなるべからざるものなり。経書に仁といふことなく
あれども畢竟人に志のひさうの深ようにてもとゝかし。孟子
曰。人皆有所不忍。達之於其所忍仁也。又曰。惻隠之心仁之
端也。しかるの諸を以て。仁の字乃本字正訓しん得べし。
後世に及ぶ。仁を人にそなはるの理とし。無欲を静と仁り
いふの工夫とし。ゆゑハ皆佛老の説に落ち。聖賢仁をのゝ面
の旨にあらず

聖賢の書に。仁といふことは。はらくなり。仁者人を安宅やと
いふことはれは。仁を稱ゑして人との行はれはなかさうとこゝろ
ゐたとへはよれ家を居て何の氣をもあさうことし。かゝるゆへは
されを安宅といふ。是仁の体明を説く。克己復礼為仁。並に樊
遅司馬牛の問に答ふるの類は。仁にいふるの立丈を説く。孟子擴
充を説。及違を於是而思仁やといふを示したるなり。天下歸仁。
在邦無怨在家無怨の類は。皆仁の効驗を説く。惻隱を心仁を
端やといふ事はれは。仁を行ふのもとはいふ事はしいふことを
を根本を説く。志かもとも何ものも仁をこそ下の述聖人の事と
見えて。かくの事へ。
後世仁の説さまくあり。韓退を曰。博聖を謂仁程子曰。仁者

天下を正理。又云。公自欲人体を故為仁。李延平曰。尚理自無私
心仁也。又覺と訓し人と訓するの説あり。程子先を非として。孔
孟仁を言愛と合ふ。研究すること二三年ふくを未晩といへり。
又云し訓し生と訓するの説あり。朱子にいふ。心を述聖を
理と註せられて。仁の字義定まり。韓退の説。先儒用をもつ
て体をもつてのそもつなり。畢竟程子以来の説おくに矣。何
ものもとも何ものも仁を人の性にそなはりたる理と見えて。聖人
の旨とことなり
韓文公原道に。博聖を謂仁といへり。伊川聖を非として。かゝら
く。孟子曰。惻隱を心仁也。後人遂以聖為仁。聖自是情。仁自是
性。豈可專以聖為仁。孟子言惻隱を心仁を端也。既曰仁を端

則不可便謂之仁。退之言博愛之謂仁非也。仁者固博愛然便以博愛為仁則不可。此意ハ畢竟仁の用を知りたるまでにて、仁の體を得ざる時ハ次第なる事をも夫子樊遲問仁に答ふる愛人の言へ又孟子にも仁者愛人とあるやうな文ばかり取て、不思違之旨を不思、仁ハ體もある事を博愛とする故て仁を解せられし。誠にあやまらぬ次第なれども韓子の説の通りなれバ愛の情を以て仁といへる也。是を巧言令色鮮矣仁と云ひ、仁者如射のたぐひの云るも次の愛のことおほくの事を不思のところにて聖賢の云ふ所也て見れど、仁ハの事にして語孟の中にあまた見へたる故に韓子の説を全くかのごとくにおもひ次第に後世仁を理としての説よ

是ハ傳ざるなり

當理而無私心為仁と云ハ是ハ李延平問答にある詞也。論語集註第三の巻に出たり。是ハ人のなすことに於て理にあたりても或ハ私心あることあり。又私心なきことも或ハ理にあたらざることもある。仁者ハそのなすことを私なくして理にかなふ也。理にあたりて内なる私欲を離れ純天理にして一毫のにごりなし。殷の三人又楚の令尹子文斉の陳文子が徒ハ理にあたりて次第にて私なしとハいはれざるなり。ただ忠清とハいへども仁とハ云れぬ故にてあるべし。これ詳なる事ハ集註大全等に出たる語孟字義に出たり。それを離して見へらくよれハ誠の字の訓とすべし。仁を説べきの次第し當理而無私心を仁とする

しれハ何事の諸説をひろく誠の字を訓ぜんやし。畢竟宋朝の先儒ハ何事も仁を理とし見てたる由へにかくのごとく解せらるゝ事しと聖人の旨にあらず只やうく仁といふ字のハ人の為にするをふあり大徳なれハ文々文字の行迹のことそれぞれのことふかくいふよゑてしいたる事ことをたゞく忠清にいたるハゆるされて仁といひ事洪とのことなり。集註に又陳文子が事を論じて云く。潔己去乱可謂清矣然未知其果見義理之當然而能脱然無所累乎抑不得已於利害之私而猶未免於怨悔也。故夫子特許其清而不許其仁とあり。是ハ先儒の仁といふものを無欲と説くを本体とせらるゆへに清といへども仁と混合して見られけり。それゆへにかくのごとく論ぜらるれども志事ともに利害のことくにしれ説

色して怨悔と徳ねかとさるゝ。それハ仁ハいふにおよバず清ともいひがたし。本文ハたゞ不義の國に居ることをいさぎよく去るハ清浄なることなれバも仁の大徳を得る人とハいひがたし。仁と清との差別をふかくいふとなり。詳なることハ童子問にこれをあげらる張無垢仁者覺也と説るゝ。又謝上蔡も覺をもつて仁を説る。張無垢ハもつぱら禪学を崇信したる人なれバ仁を禪見にて見たりたるもの也。ともに辨におよばず上蔡ハ程門の高弟なれども又論理を関ひそらして多し。所謂信其所説而淫其佛也。此の人なれハ子韶の説を其失同なし。朱子の語類に張子韶謝氏の説を弁せらるゝなり大意かくのごとく。覺ハ是れ智に属す。仁者ハ徳ひろく覺をそなへたるものとして仁

とらへかたしとなり。又云。仁ハ難言。不得上蔡諸公不把愛做仁。又論語
或問ニ謝氏の説を引て曰。蓋亦生於以覚為仁而謂愛非仁之説
耳とあり。是朱子の意見なるへし。畢竟子韶上蔡の説何とやらん差を
以て仁の義とさるへし。其是ハ仁にあらす。又しくして弁しかたく
見へし。朱子雑辨あり。又集註仁の字の解に、又学者の義を
得へきなり
又公を以て仁と訓する説あり。是も雑る説なりてと詳に
せしを程子の曰。公ハ只是仁之理。不可将公便喚做仁。公而以人体
之故為仁と。又朱子文集或問に書簡に或以仁訓覚訓公者
とありて當時を以て解する人ありとみえたり。程子是れ
を非しせらるへ。仁者ハ天地万物を一体と語る所以にて仁の理を
いへるにハ彼しを公といふハ当らし。程子も是の如くいへハ仁を訓
するにハ適切ならすして。蓋惻隠のこころありて。
仁と云へしと。朱子の曰。公則無情。仁則有愛之ありて思いれ
しをも公の字を以て仁と訓するにてハ虚空に似して、あ
たるところあり。公而以人体之為仁とハ蓋其の意ありといへとも文
人の性とみるもののかく、古学の人のいふる仁と云とハ異なり
又人を以て訓するの説あり。程子是をも非とせられたり
既に上にありしとも孟子中庸にも仁者人也と
あり。古今の儒者を解してあり。是中庸人ハ
のるうろして。其れの音を以て是の文ハ音の字をとりて大経り
解する義也。宜やしいへハ總て後世の説あくへんし

の生理といふやうにおもふべく。人の字を解せるとおれ又ある上なり
ことなり。平岩の註は。以人為体と解あり。是はあやまりなり。又生
の字を以て訓せんといふ説あり。是を同じ紀なるなり。語類にあ
り。近思録註はまたをひく
程子曰。淺腔子是惻隱之心。腔子とは軀殼とを註し。此
裏とを註せ。人の胸をいふ。人の一此にみちくて皆惻隱の心と
いふことなり。此無りにくは甚しとなるおとをなれやうなれ也。
朱子の説は曰く。淺腔子是惻隱之心。不特是惻隱之心。淺腔
子是羞惡之心。淺腔子是辞遜之心。淺腔子是非之心。深淺
之塞。都無空缺處。又曰。如刀割着亦痛。針割着亦痛。葉平岩
曰。人之一此惻隱之心。無所不至。故疾痛疴癢鰥寡則常人心

意は惻隱の心人の此うちに淺くてあるなるに此にふるなるに
徹し。あつかれはあつしと覚へさむかれはさむしと覚へうなるは
うへをもつ。渇をれは渇をしろ。乃至此をさろ換をれはいてこを也
ゆへとや。程子の語。朱子の意乃ちとくにはなへされとを程子の語
に又曰。心生乃也。有是心斯具是形。以生惻隱之心。人之生乃也
とあり。程子は淺腔子是惻隱之心といふを朱子の意乃ちとく
なるへし。是又仁を人心の生理と見たるなるへは。かくのおとく
なり。説出來まり。是を聖賢の意をたゞ説されは。仁は人を愛する
の德。其事を為ぬるとれは。吾惻隱の心をいつ故は惻隱之心
仁を端といへり。おもふは知覚ありてとはなりとよろ相あつかる
程子言書に又云。切脉可以體仁。朱子語類は揚乃史曰。脉是

那血氣周流切脉則便可以見仁曰弦脉理貫通乎一身仁之
理亦是僥地とあり程子又云親鶏雛此可親仁と朱子の云く小
小之物生理悉具又云初与嬾底便是又云當是時欲啄自然未有
所謂爭鬪侵凌之患者只此便是仁やとしかへ是三説おくは
かゝ次ぎ鶏雛の小なる物にも生理使るを以て仁と志るといふ
ことなり是も切脉のことなるとは同じ理なる人し畢竟仁と
生理と見たる説よりいくたるものにて聖賢仁とのたるの旨
にあらず

論語集註云仁者愛之理心之德孟子集註云仁者心之德
愛之理と二の句前後の同じかゝることも先儒よりも説くあり
畢竟論語は孝弟の章なる由人先に愛の理と註し孟子は仁

の本体を仰らるゆへ心の德を先に挙らるゝと見えたり何也も体
に於て出来ると云雲峰胡氏は此二句体用を分て心之德為体
愛之理為用大全に注ふさなり是は誤りなり朱子の旨にあら
次語類に云次心之德而專言之則未發是体已發是用次愛
之理而偏言之則仁便是体惻隱是用と是にて志る人し二
句と同に体に於て説て其發する所を用といふなり畢竟宋朝之來
仁に偏言の仁といふと專言の仁といふとあり此れは程子の易傳
に四德之元猶又當之仁偏言則一事當言則包四者といふなり
いつ偏言といふとれは仁なるのみなり專言といふとれは義礼智
信の四をかねてこそ中にあり其れゆへ心の德といふは專言の仁に
て人の生理といふ義礼智もこそ中にあり愛の理といふは偏言の

仁まく。人を愛するの理をかかりたるをいふ。此二つを兼ねて。心を
德愛して理し註せらるゝなり。此意は仁は人心の生理なる事なり。
尚ほ流行生々しきやむことなし。此生理なることは心即
死し終る。これを心の德といふ。仁義礼智をさしてあはせたる事
なり。其内ふくむ物を愛するの理をかかりたるを愛の理といふ。先
傷の說は謝上蔡覺を欲して仁を訓するを非とせらるゝ也。
海膽子惻隱を心といふ理を見るとは生理ありて物を知覺
する上なり。愛は須ることを以て仁といふ。予故は智へて。先傷は
能覺能愛して理為仁と。童子問の序中にこれをいへり。猶又大
全集註を詳にすべし
宋朝程子以來。仁の說さまくなり。其内ふくむ矣間ありといへり。

畢竟仁を理と見ん性と見ることのほとく。聖人の所謂仁といふ
大は矣なり。希せまんはあるへからず。朱子は程子の說を祖とせら
るゝ也。又かし矣間あり。程子はもとより仁義礼智信を又性と
定めたれども。又仁者天下の公。若し本やといふ說あり。然れは
若やけなる所を仁とせらるゝと見へたり。朱子はもつらんて德
愛して理と註あるは。家一人は使るの理をさしていふ。これはよりて。
仁をもとむるの工夫といふとは。此心を清淨にして。一毫の人欲の
ほとくなく。天理の自然を法くすると。仁を得るの境界と須。論語の
諸註を考へ見るへし。畢竟氣質を變し物欲を除く。明德先
本体は立へるなり。聖人のとしへを見るとは。夢色臭味の欲
は人のかならず。あることなれは。此さらをたらなる得を屬さす

あるひハたゞ礼義をしらずして、けのゝにもつまさるなうにきる
ことなり。仁ハ人を愛しむのみなれバ、一人二人の上より恵ミ及びて
利益あることを仁とハ云、或ハ身を殺し、或ハ忠孝を尽し、或ハ礼義を
ふくむハ皆仁をもつてしるの立志なり。論語孟子にあらハれて繁
なくありて、畢竟仁ハ天下の大なることを真実の徳内外遠近
にてるなしてなれとも、後世是を行ふハ性の理もせざるなきまに
つまりくさねくむかしへりもしおほかて日用に手もれてなき能く
こと出来ぬことをかんがへ居し

有子曰。其為人也孝弟而好犯上者。鮮矣。不好犯上而好作乱者。
未之有也。君子ハ務本。本立而道生。孝弟也者其為仁之本與と。此ハ
孝弟の徳乃至極大切なることを称美して、仁よりてなすべしとのく

偖なる此こころハ。人の生付。親に孝行に兄によくしたがふものハ。せん
能生付にてまちがいなきものなり。かくのごときものハ上にさからふことを
このまず。ことにみだりに乱をなす事ハなし。偖して此理によく思ひ當と知るべし
ハ孝弟を以てなし。此孝弟なるものをもとゝしてと言ひたてし
ものなり。されバ君子たる人ハ其本に付て、本をたてゝ根
本を其第一に行ハ、此れハ根本立ぬれバ道徳是にゆるぎなく
して、やがて此れハなり。然れバ孝弟といふものハ仁よりいでる根本
なるといふべし。仁といふものハ天下の達徳にして、其本ハ孝弟
のみより行ふといふべし。孟子の四端擴充の説と符合して、うたがひなし。
此理をよく明なるバ先儒の説ハ是のうつ次。程子曰。為仁以孝弟為本。論
性則以仁為孝弟之本。又曰。孝弟是仁之一事。謂之行仁之本則

可謂是仁之本則不可蓋仁是性也孝弟是用也性中只有箇仁義礼智四者而已曷嘗有孝弟来然仁主於愛ゝ莫大於愛親故曰孝弟也者其為仁之本歟ゝ此意ハ仁といふものハ性なりとて孝弟ハ性の用なり。故に性の上よりいふときハ。仁ハ孝弟のもとなり。孝弟と仁の本といふ事ハ。次に仁を行ふ上よりいふときハ。近きよりの父兄に孝弟を尽して。其上にひろく人に及ぼし物に及ぼすハ乃ち仁にてあり。是れ孝弟ハ仁を行ふの手はじめなり。故に孝弟ハ為仁之本といふなり。是れハ先儒の仁といふものハ聖賢の仁の事をしたがひ其ふかく義のごとく説破されたるものなく。経の本旨にあらず。次にいふ根本の事なり。本始の事なり。有子ハもとより仁をさて下の達徳としたしく仰せらるゝ也。孝弟ハ仁の根本

としていふ上に論ずる所なり。先儒ハ仁を性とし愛を性たる用とせり。孝弟と仁の本としいふて。是れ何ほどよく仁を行ふハ孝弟然るに絶して次に本始の事に註せらる。猶も其を宗物に其為人やしあるハ学問能為とまゝと。天性孝弟なるものといふ。行ふにむかのことにあり。次にいふ君子務本本立而道生といひて。来不孝弟為仁之本与といへるハ孝弟と以て仁の根本とし給ふことを。ことより其説ならし。いかんや為仁之本与の一句。仁の本たるがごときよむべし。仁を行ふの本なりとハ解しがたきなり。此ハ古義不詳なり。又古註を按ずるに孝を為し論語に。人而不仁如礼何。人而不仁如楽何とあり。仁しるときハ是ハ其の徳。礼ハ礼儀。楽ハ音楽といふ。人にして其の意徳の法なりと。

ことに礼楽を行ふとれば礼楽を能行ひ来るべきなり。
そし慈悲の徳なくしていたく法ゆる外面まとく礼楽を知らなふ
とれば礼楽を行ひ来ゆるといふことなり。即礼云礼云玉帛云乎哉。
楽云楽云鐘鼓云乎哉とのたまふとは意なり。王莽漢の王
下を慕く。周礼の法を行へとも法ゆるまで身をかろはとかこと
れ出れなり。集註に二説あり。何事をおくはしからず。其内李氏の
説を分明なり。游氏の説は礼楽はまたく礼楽のことにせらる事と
を。人ゆ不仁則人ゆ亡矣とあるは。仁を人心の理と見たるゆへ
なり。程子は仁礼楽とも不理と見たるゆへに。仁者ならずて
正理。其正理則無序ゆ不和と註あり。其の二説は基本を見ていし
なり。其事は第四章にとうしなへは次第あしく却ひあ

はぬといふことなり。仁を慈悲の仁にあらず。礼楽を鐘鼓玉帛のこと
にあらず。正しき理を仁といふ。次第あるを礼と云。和さるを楽と云。
大に聖人の意旨にあらず。其世間のことにはかくのことにはあれ
とも本文の旨は左にあらず。たゞ仁は仁礼は礼楽は楽とも説く
熟玩さへし

顔子の仁を問ふ事は。克己復礼為仁とあり。此礼仁を行ふ者
工夫を説なり。己といふは家所をさしていふ。凡人たるもの不仁
なることは皆家所からにして。人を多くさるにしたるゆへ。殘然刻薄
にあり。彼らにしたく。人家のへてなく。人を一枚に大切に却ふ
とれば先仁といふもの地盤たることなり。彼事とも家所は一ツに
して。其下の人はかれらなし。其下の人を一同に大切にせんと思ふ

てしへ人のふるまひをよくまなびてよくこれに
ならふことをいふ。教父子兄弟夫婦朋友の
忠孝をはじめ。家父母に善を法(ノット)ことをはじめ
いつさいのありとあらゆる事親疎を近遠の差別(シナ)
つゝしみてそれ〳〵に応接(アシラ)ふべきのみち
をおしへ。たとへ人のあざけりをうけ
たゝりをこうむることありとも父母よりは三年の喪を服し。祖父母は
一期の喪を服し。その他喪親(ソウ)疎親(ソ)の別(ワカ)ちありて九月又は五月三月のふかく
あさきにしたがひ。それ〴〵の礼をたてさせ。おのづから
敬愛(ケイアイ)の情(ココロ)をもよほさしむるのみちをいふ。庶幾(コヒネガ)ふ
ことをもつてこれを名づく。仁は保理(ホリ)安全(アンゼン)ともいふ。
国郡(コクグン)より邑里(ムラサト)郷村(サトムラ)をへて学堂庠序(ガクカウ)をわかちおき

ことわりをおしへ守(マモ)らしめて。故(モト)より夫(ソ)の己(オノレ)が私(ワタクシ)の
ごとく為(シ)ことなく。而(シカ)して父(チチ)母(ハハ)斯(コ)二者(フタツ)を尤(モツトモ)重(オモ)んじ中庸(チウヨウ)に仁者人(ヒト)也(ナリ)。
親(シタシ)親(ムツ)為大(ヨキ)義者宜也(ヨロシ)。賢(カシコ)為大(ヨキ)親(シタシ)親(ムツ)之教(オシヘ)。賢(カシコ)等(ヒトシ)礼(レイ)所生(ショウ)
とあるの意(コヽロ)にて。あまねく人(ヒト)を愛(アイ)するを説(トク)なり。さてこゝを
いつくしみ。「日克己復礼(ヒニカツテオノレニカヘルヲレイ)」「天下帰仁(テンカジンニキス)」と。天下の人(ヒト)仁(ジン)の被(コウム)服(ル)をいつくしみ。又(マタ)修(ヲサ)同(オナジ)き孟子(モウシ)時(トキ)には。親(シタシ)疎(ウト)言動(ゲンドウ)するを礼(レイ)のうへにいつくしむ。を旨(ムネ)として明白(メイハク)なり。先儒(センジュ)の説(セツ)よりくだし。しかし
私欲(シヨク)といふ礼(レイ)に夫(ソ)程(ホド)のふかき意(コヽロ)あるべきや。人欲(ジンヨク)
は出(イデ)ざるをもつて。礼(レイ)とするにあらず。独(ヒトリ)己(オノレ)のみ人欲(ジンヨク)なからざる
をもつて。礼(レイ)とするにあらず。礼(レイ)は天下(テンカ)の人(ヒト)仁(ジン)者(シヤ)ならしめ
をもつてのごとくならしめんとするの道(ミチ)なり。

條目をとひてこれハ。非礼と視聴言動せざれとなり。非礼とハ己
がわたくし。所謂人欲をいふて。是後世の学問の旨なく。聖賢の
意にあらず。況聖賢の言に己といふハ。何事も人に對して云。
家族のことなり。人欲をさしていふことにあらず。礼ハ礼楽礼儀
の礼。天理をさしていふにあらず。人をさして非礼と人欲といふハ。
それあやまりてこれを非礼とせバ。非礼ハ連続して私欲のこと
となる。本文ハたゞ上文の復礼の礼とうけたる礼と同じくみて。
礼にあらざれバ視聴言動することなかれとなり。中庸に。斉明盛服非
礼不動。所以修身也。易の大象に君子以非礼弗履とあるにて
ほしるべし。然るに非礼と人欲と別するハおそらくハ誤
なり。畢竟夫子の意ハ。仁とて天下の人の見るべき礼を取るべくこれを

害することなり。此傷ハ仁と人を傷る理なく見ゆるにて私欲を
さりて物に立かへるといふ主意ちがひたるにてあらためてしるべし。ひあり
夫子顔子を称して曰。回也其心三月不違仁といへる集
註に云。仁者心之徳。心不違仁者。無私欲而有其徳也。程子
曰。不違仁。只是無纖毫私欲。少有私欲。便是不仁と出せ
るを見て克己復礼の章もほしこれなり。本文の意にあらず。仁
といふものハ。天下の達道にて。人の倫をふみ行ふ道をさしていふこれ
をみなり。然るに天下の人生付一招なりさせバたゞ私欲ある
倫なりて。そ人をさしていふ。またいひ出て。故に聖人
のことハ人の性のまたなきをむすべしと示したまひ。然るに顔子ハさ
大賢ハ亜聖の資なれバ。さんなるにもつからふして。一毫残患

の念胸中にはさまることなれども。三月の久しきはいつる。されは
よりて。そんこ三月不違仁と称義しなるなり。心の為まかなふ
をよろしと云。依於仁といふかことし。為まそむくをよろしと云。違仁
といふかことし。是にて仁といふ字のは人の為にしてこの心のされ
そむかさるやうにすることあさらかなり。先儒の説乃通りなれ
は。明鏡のくもりをさりてく。本体の光明をかへるかことし。集
註に無私欲而有其徳やと解せるくされなり。此通りにては。
孔子の顔子を称したまつは。そんこ三月昏昧なる須といふ為く
して。仁をたかはしはあるまし。されとなり。後るにそんこ不違仁
といふは。いかなり歇後語(ナゾノコトバ)は類を表ようにいへは表をくしてやく
れらあることをうしろよりの言はかしてまつりをくの為にて仙

ようにそれ聖人の子言第語孔と説義と説中と説敬と説
は只一口に無欲を辞といふの簡約にしてはありやすれは志か
すや。されは仁を以て理しまたるの弊なり
仲弓問仁は出門如見大賓と答へるなり。されは又顔子に答へると
同しきにて。仁を守るの方をいふ。出門如見大賓といふは。ものの
ことに大事にかくるなり。己所不欲勿施於人といふは。人の心を
をしはかりておしくあらさることなりかくのことくされは。人は
對して如在なく。人を恵をかふむるによりて。仁といふ為し。
そ志るしは何かにあるくを。人より家をうしむるものなりし
なり。そ旨をつとをあさらかなり。そ内顔子は大賢王佐の才
なれは。大事に仁するの為をのこるに。仲弓は顔子にはなられは。

浴く仁をとるの方をのくるひとく邦家無怨をしるしとしたまふ。是又分明なり。集註に敬以持己。恕以及物則私意無所容。而心能全矣といへるも。是も一心を收斂しとくしてこの私意なれを仁といふ。上の章とほしれそこにとく。恕以及物の工夫あるとも畢竟本心の理にかへることなり。夫子の旨にあるを司馬牛の問に。仁者其言也訒とあり。訒とはかくしとよそて。物いふことをさしひくへいふことなり。我に是もなれことをまふ。ゆうれあらつせしくたしかにいふは畢竟物にて無未にして。人を何とも物にさるよりおこる。仁者といふものは人を大切にして。何ことにくも。いやしくも語ることなきれは我に行ひくなしかれことをはにくしらつせしくいふことなしといへり。

されは人をしくひ人を免くむのつきはえされとも。人に對して偽りあさむく誅未なることなさを仁者といふ。巧言令色の章とあらせりへし。集註に云。仁者心存而不放故言若有所忍者不易發と。是も放心せさるところを仁といふ。上の章とほしまなり

樊遲仁智をあらせ問ることに二章。まつ事明らかなることなり。仁を問の章はたゞ一章あり。夫子の答には居處恭執事敬与人忠。雖之夷狄不可棄やしのことなふ。されは人たるもの常くいんさんにしてく。物にして大切にしけ。人に對して此在なれは仁にあらふといふことなり。志のところ集註くりしれ註なし。新安陳氏曰。此与答仲弓問仁章當參看。彼以敬恕言。此以恭

致忠言蓋居処恭執事敬与人忠即忠也一而已矣動執事敬即私意何容而仁豈外是哉此二語学人切要之訓学者当服膺勿失焉

○巧言令色鮮矣仁○程子曰巧言令色務悦人以偽与仁相似而実不同学者不可不察也愚按巧言令色固非仁之類然亦何必仁之有無而言之乎蓋仁者徳之全体而人之所難能也故聖人毎以仁言之而不軽以許人学者当務其大而不可以小害大也

○曾子曰吾日三省吾身○程子曰三省者三次省察也愚按曾子之学専務実徳其自治也厳而責人也恕故其省察如此

○道千乗之国敬事而信○程子曰敬事而信所以節用而愛人也愚按敬事而信雖為治国之要道然其本在人君躬行之如何耳

○弟子入則孝出則弟○程子曰此言為弟子之職也愚按此章之意蓋言人能孝弟則自然謹信汎愛衆而親仁其序如此学者宜従事於孝弟之間而不可躐等以求高遠也

○子夏曰賢賢易色○程子曰此言為学之本在於変化気質愚按賢賢易色者好賢之心誠切而篤実之謂也学者能如是則其気質変化而徳性成就矣

○君子不重則不威学則不固○程子曰君子之学必自重始重則威厳自生而学有所固愚按君子之学以成徳為貴而威厳者徳之符也故君子之学必自重始

○主忠信○程子曰人不忠信則無以為人而進徳之道無由而入愚按主忠信者学問之本而為人之道亦不外於此

○毋友不如己者○程子曰不如己者謂不同己者也愚按不如己者謂不善者也

○過則勿憚改○程子曰人有過而不改是謂過而益過愚按過而不改則過日積而不可救故聖人毎以改過為言

○曾子曰慎終追遠○程子曰慎終追遠謂喪祭之礼尽其誠愚按慎終追遠者厚之至也

○子禽問於子貢曰夫子至於是邦也必聞其政求之与抑与之与○程子曰温良恭倹譲五者皆徳之発見於外者也愚按温良恭倹譲五者皆徳之発見於外者也

○父在観其志父没観其行三年無改於父之道可謂孝矣○程子曰父之道善則当三年無改若其道非則豈可以三年無改愚按父之道善則当三年無改若其道非則豈可以三年無改

○礼之用和為貴○程子曰礼之体雖厳而其用則和順為貴愚按礼之体雖厳而其用則和順為貴

○信近於義言可復也○程子曰信而合義則言可復愚按信而合義則言可復

○君子食無求飽居無求安○程子曰君子之学以治心修身為務故於飲食居処之間不暇及也愚按君子之学以治心修身為務故於飲食居処之間不暇及也

○君子不器○程子曰器者各適其用而不能相通君子之学貫乎上下通乎本末体用一源顯微無間豈可以一器名之愚按君子之学貫乎上下通乎本末体用一源顯微無間豈可以一器名之

○子貢曰貧而無諂富而無驕何如子曰可也未若貧而楽富而好礼者也○程子曰貧而楽富而好礼則心広体胖動容周旋中礼徳之盛也愚按貧而楽富而好礼則心広体胖動容周旋中礼徳之盛也

○子貢曰貧而無諂富而無驕何如子曰可也未若貧而楽富而好礼者也○程子曰貧而楽富而好礼則心広体胖動容周旋中礼徳之盛也愚按貧而楽富而好礼則心広体胖動容周旋中礼徳之盛也

○子貢曰貧而無諂富而無驕何如子曰可也未若貧而楽富而好礼者也○程子曰貧而楽富而好礼則心広体胖動容周旋中礼徳之盛也愚按貧而楽富而好礼則心広体胖動容周旋中礼徳之盛也

○子貢曰貧而無諂富而無驕何如子曰可也未若貧而楽富而好礼者也○程子曰貧而楽富而好礼則心広体胖動容周旋中礼徳之盛也愚按貧而楽富而好礼則心広体胖動容周旋中礼徳之盛也

まかなる人ハみづから清くしてよく外に向ハるゝそひをまさしむ
なきことをいふにはあらずして心にあるところあり仁者としていへるにはなくて
も仁の徳にちかし。又た聖人の意あるべし。又仁者ハ
如射（ごとし）射しやハまづ身をなほしくしてのち的を射る。あたらざるときハ面く
の工拙なれバ誰をもうらむことなし。次手ぬきのなれバしかり仁者
乃象既に反求して、みづから清くしてよくかへりみてまことの義
備ふる分明なり

又博学而篤志切問而近思仁在其中矣といへるも上の意のごとく。
此四つのことハ我を学びむる上に兼備はせねバならぬことゞもなり
仁といふものも如斯のことくふかくれバ仁といへるの身の中
にあるべしとなり。たゞ人ハ人に問ひもとく書経籍を索揚と学ぶべきなり

言ことまことし。念とハよく宜をはかることをいふなれバせん大
切に思ふとハいふ心にて、先の人をまて宜しき物を得るの道
あり。学を得る事博く古へを考へ人によくたしかめ善悪の端
なれバいれさとしれバ仁といふものハおのづから仁にいたるべき
なり。故に仁在其中といへバ直にさとる事なるがおのづから
さとる事あるといふ。禄在其中。直在其中といふの類何れも是
をいふなるべし。此二語ハ引ところの本文集註の内なり。
何れも仁といふの徳と見てもあらたる意なく註あり。それをよく前
に論じる例よく／＼得べし
孔子の門人に子路冉有公西華のことをとふ。孟武伯が仁なるやと
問に何れもそのよく深く称せしも、不知其仁也と答へひとり

顔子ばかりハ三月不違仁と称し給ふ。二子ハ顔子の徳に及ばざれバ。夫子の仁と許されざりし。さるを思ふべし。又春秋の間。賢士大夫の内にも。楚の令尹子文斉の陳文子ハ。忠清と許されて未知焉得仁との給へり。これも一徳ハありしも仁の境界までにいたられず。かつ。彼らに管仲のごとき。子路子貢の徒何れもそれ仁をとるところなれバ。夫子ふかくその仁を許し給ふ。如其仁如其仁との給へり。此の事ハ古来議論多きことなり。子路冉有の人許し給はざるを。管仲にゆるし給ふこと、まことに疑し。先儒のこたふるハ。子路冉有に許されざるハ仁の本体をいはく云々。一毫無欲の境界まで至られバゆるし給はざるなり。管仲ハ仁の功ありとのたまふ。未能くいたらずして集註に云管仲雖未得為仁人而其

利澤及人則有仁之功矣。又小註云。仲之仁是粗処。至精処則顔子三月之後或違之。ことと志るべし。先ふかくハ仁といふに二様あり。しかるに新安陳氏曰。仁有以心術之精微言者。非大賢以上不能安仁不足以當之。有以事功之顯著言者。是なり。強ていへバ聖門のいはゆる仁といふものに二様ありといへども見えたり。子路子貢の管仲を仁者にあらずと問ひし時、孟武伯子路冉有を仁なりやと問ひし時、けしからず。強ていへバ夫子の仁を許し給はず。二様はありながらや。畢竟天下国家を志す平生て管氏の恩澤をかうむるハ仁の功。所謂正面をあてるなり。其民受其賜禹湯の徳を称して仁覆天下といふハ即是なり。管仲の如き王者の正にあらざれども桓公を輔けて夷狄をはらひ。後の世までも左

衽(ジン)絲(シヨリ)離の風俗を免るゝハ又仁といふものなり。然れハ子糾(キウ)の死
後ハ桓公ハ来るも世を救ふの志あるゝ。ところ其を信ひ。まり
覚へのあるゝ事ハ世の功名富貴を免るゝ事ハ。主を背ハ
こゝあるゝ事ハ来るの後ハあらさるゝ志るへし。然れハこれを仁と
許したまふことゝ志しかるなり。又顔子のことれハ不幸ましく當
時ハ用ひられ其ハ國王下ハ知ふ人の仁ハ見へされとも。平生ハ法
行ふらく。何時ハ世ハ用ゆるとれハ伊尹周公の功業を以
て天下國家ハ免へるのあるゝ事ハ。たしかハ見へ事なり。然
れハ仁をゆるされ申しれや。平生ハ慈愛惻怛の心を抱して。
才ある上ハ世ハ用ひらるゝ。その志るしあるへきこと必定なり。た
とへハ名醫の人を療して死を生ことを上手といふ事ハいかなし。

たとへられりあらうく。療人の志るしあるゝ事。疾をなをすの覚
ある人ハ上手といふ申しれや。されハ聖人仁をのくまふ事
志るへし

聖賢の書に仁といふところ。後世より見れハ義といふ事ところ
あり。体といふ事ことゝ事あり。論語ハ志士仁人舎生以成仁といふ
事ハ比干の諫て死するを殷有三仁といへり。管仲の事も。後
世の学者なるハ義ハ大ふの疑あるへきに。子路子貢何れも仁ハ
そむくの間あり。又巧言令色の人も後の世乃人のことなるも。
誠をくなしといふ事ハ難矣仁とのたまふ剛毅木訥ハ誠ハ
うしといふ事ハ仁ハ大ちうしとのたまふの類多し。是ハ古人の聖
賢ハ言つたる人を救ふを徳の意抱と志たまふ事ハよろしく。然るの

とへ人に對しくたくらる。主人のためは一命をもつるも。主人
と大切におもひ。慈愛のきろを以てもつるにようにて。おれを仁と
いふ人をいつくしさるを。人は世在なさんやうあさむるされは。まて
仁といふなり。後世には。主人に對しく。背を見世。命をかけて
場をもつるは。家一分の義理をもつるとしおもふまようにて。義をて
たぬ義をかくるといつく。そうら義を以ておれをさつく。人をあ
さむるさるを。世を家はことを立るといふなり。そうら後にて
いふをしはりしくいへは。ほしれとにふ。おらく。舍生而ニ義ヲといふこと
をあらはさるくたかひてることにあらさるとも。古聖賢のまことを
ちかひてる事にかくのことし。古へより國家の興廢に命をもとくて
君のゐるにもる人。何れとをあらう。義士義人といへとも。仁にたかふ

たかぬといふこと。秦漢出のこの論に見へたり。そもまて古今數法
の是ほを見るべし

或人の云。諸孟字義に仁の字を雜して云。慈愛を德。主を丙外。
先實通徹。無前不至ニ謂仁といへり。おれにくは。墨子のいはゆる
兼愛といふとほしれとにふく。聖人仁をのたまへの旨にしなり
ことし。曰然らず。是又後世のこゝろひなり。後世の人は仁は仁れは礼。
此一句はくはいふなれせうにおもふまようにて。かくこゝろかふこと
なり。古へは左にあらず。衆功兼合せくを人をまつてくしてるを
なるは仁れと大切なることはなれとも。たゞ此一つにくるをもむる
なり。そもゆへ好仁不好學を蔽や愚とあり。いかんや聖人仁とれ
ゐるをこれはどのつゝらに義礼ともあひてることなり。しるるにようにて。

仁といふ字の委曲といふときハ。義礼智とわかちあひてつけあるをも
いふ事もあれども。とかくいふてハたゞ一字正面の義別とのミ付ハ。
慈愛の徳をしいふ事ハかなハざるなり。孟子ハ義を浹
て礼といひ。ひろくたゞ慈愛をあるところとあらしむるよりて愛
を篤し説き。慈愛の弊に出るおもひハ。亀の浹べん
や字義首六條に仁義をもて合せる。水火のたとへある上ハ。尚更
孟子に混ずることなし
或人の云。孟子に君子所性仁義礼智根於心とあるを。志を
仁義礼智ハ人の性なるにあらずや。何ぞ性にあらずとの浹といへん
し。曰。志ハ浹此章ハ仁義礼智と性として云の能換と志をさ
のこさんぞ。人ハ性をいへ事なりの能換とを是一何ぞなれハ。

先儒の意のごとく。仁義礼智の性。人ごとに具りてあることのなりかハ
君子のミにかぎらず。誰とても皆性とすべきなり。堯舜より塗
人にいたるまで。人皆根ざしてあるべきを偏さて。
即ち仁義や。志なる孟子に君子所性と云。又心に根さ浹
とあるかハ人々の思ひて性とすべし。浹まで心に根
ざす仁義あるにかぎるとのことなり。此章の主ハ仁義礼智ハ天
下通行の名にして人々のうへに行はるゝ事なり。経礼を人の生
付さなく。なるにかぎる。志礼を行すべしとも。私欲にかゝる
と行ふべからず。底で心にかゝりてあるべき。君子の生付き。名
別人よりも思ふなるべく。仁義を行てもかのこゝろの底を心
とうく内にあるべし。故よく見るべし。ただ人ハ君子の仁義ハ

草木の根あるゝ枝葉を生ずるゝことく。衆人の仁義ハ根なし
ふ枝葉のゝ法ゝ也。ゝ根さきといふハ其の日多ハ。
仁義と乃法し見たるゝ也。ゝ物學の人書をよ
むことゝ無末なるゝより。前後の文句に。性の字ハの字あるゝ
ゝりゝ。ゝ有ゝ如ゝ。人法ゝ仁義を性といふ也さるゝ。
此章ハ大なる明なることゝ也。
或人又云。孟子に。仁義礼智非由外鑠家也。家固有之也
いへるゝ。然ハ仁義ハ人の性まあらずや。曰ゝ有ゝ。孟子を熟
讀しゝ。くわしくまゝまゝを見ゝ。孟子の此章ハ。ゝ公都子ゝ性善の說をうたゝかゝるゝとこゝ
て。仁義の内外を論ずるゝあらず。惣別古人の人ハ後世の見をこゝ

なるゝ也。仁義をて下の乃ゝ也。賞罰上下ゝ無しゝ。
是人居ることゝ也。乃至聖人の乃を信ぜざるゝ也。老莊告
子ゝ安ゝ得ゝ也。ゝ此れといひ也。ゝ此れ也。ゝ乃ゝ
たゝかゝ也。公都子ゝ尚以仁義の乃法ゝ也。ゝ此れ也。然
ゝ也。人ゝの性を善といふ也。ゝ此れ也。孟子
ゝ此れとさしたゝかゝ也。ゝ側隱羞惡ゝ人ハ人ゝ也。ゝ此れ也。
ゝ合せゝ人ハ側隱ゝ人ハ仁ゝ也。羞惡ゝ人ハ義ゝ也。
て。ゝ也。ゝ仁義礼智非由外鑠家也。家固有之也。弗思耳矣
しのゝ也。畢竟ゝ也。ゝ得ゝ也。ゝ下達乃の仁義礼智
に配當しゝ。人の性乃善なることを說せゝることゝ也。仁義の
理あらずゝ四つのんゝ也。ゝ也。又仁義をさしく

四端といふまあらはれ。又かならはしも擴充のつまはらりて四くのこ
まふにもあらさ。乃の若さるこしは人皆出来をもまらず乃を以て
性まあらせてく。其若をあらはしてこれを固有とし云。故に下に又
大雅烝民の詩を引て。民之秉夷好是懿德といへり。秉夷
は性の若なり。懿德は則仁義礼智の大法なり。出れにて其意
をつくしもあさらかなり。拔るに先傷は学問に一通りのみさし
あるにならく。仁義を性の理とすれば。蓋は固有を理の象は後
かの名とは。所謂性なる所固有といへかを名なり。今日の学者
は只固有といふ文字にかかるのみ。まして能ふこと多し。何も孟子
のことにかかるとも出れはたゞへは醫家は又膳を又物の象とせ。又
膳を又物は配尚していへは心は火なり肝は木なりといふこしし。これは配

尚したるものにて又膳の中に又物の質其に備りてありといへるにあらはれ
上固といふ字は後ことにしし訓しかしらしも訓して今の人皆
いかにもなるけしといふことく。其に備りてありといふとはつまり
かひあり。古義を玩索せへし
或人まこ曰。孟子に仁人心也といへり。拔れは仁義は其下の乃は
て性まあらはしいふ屬ことを。曰是まことにあらはれ。出れは人の仁を
ノチ是れしくはもつまらるゝ。それをちかく引かせて。人心也と
示したるものにて。仁を人の心と訓解せるにあらはれ。さへて經書
に政者正也。義者宜也といふの屬。何も出れまらるゝを示
さまてることにて。後世の字註のことく。其つまりとのこまふなるに
あらはれ。仁を人心也といふもこれ通りなり。たゞへは礼記礼運の篇

よ。人者天地之心といふことあり。これハ人の天地の心なることをいへり。
此語よりして人をさして天地のこゝろといふなり。又曰、志なれハ
仁とハ別名なり。いはゆる曰此ハしるさく論語の如く仁とハ
そのハ人の心の名なりと古義よりて薪をたとへ仁を火をたとへたる説
あり。是もよく了ハちくと志るべし。或ハ文雅しるくいかく。薪と火
とハ名是一物ふたつにまたなりとのなり。かしく仁とハかくのごとくふ
たとへしれハ君子の義分の説としれるにて、聖人言仁の旨
にあらす。又曰志なりし。孟子に物を以て義を比喩とるをしれり。又或ハ
仁を安宅にして義を正路にたとへ、礼義を門戸にたとへ、理義を芻
豢にたとへる類ありて書中にあまたあり。何れも君子の説なるを
知る。猶孟子これを仁義にたとへて見るとハ薪と火とをしるべく。

惺々齋蔵

仁とハ心にたとへたる也。何そ義分の見るに相かなハんや。然りといへとも
物ハ名と形あるものにたとへねハ見るにあらす。仁義ハ目に見へず耳
にきこへざるものなれハ、初学の人のこゝろえとならざることあ
るへし。其例をあけていはゝ、音律の十二調
子ハ天地自然の音なり。何国の声とても人の声なり。人の声
清濁高下ありて、それを紀律あるにあらされハ、練磨として律に叶ふ
やうにならんと楽章とハ、然るハ楽しいふものハ人の声のあつかれ
たるものなるとも、其調子ハ天地自然のなりて、人の出
声なるも調子に叶ふへきなり。又仁とハ心ともいふべきなり。
仁ハ人の心にそなハれるを、仁の徳といふものハ天下萬世かはらじ
道のあたるなり。仁政と称するハ天下の人をのせたる

惺々齋蔵

そ紛くらくとなすむるは。仁のかんくことのなくは此にあくとゐる
うろくれはたくへて萬物よくらくも親して安くすまし惣別なく
つとららしは大振を一つふ御ろ恋とももくたとめことふるく。
一人に合ことふをあるし故かちらくりんちくれはたくよろてへ
つく迷てとおもとてしあろ
仁の事は古今の説と多くしてりんちくふ論孟の内さるしあまた
しるを畢竟天下の入ゟんくし或は其を行ふくとしれ或は是れを行ふの
端なりと説く本別事なし或は其を行ひては固よりなるなきこと
なまとしても名義は當時の人上下ふ多くしてよくしるしたるなれ
なり周以前の人のこしるしふあり漢以来の人異説を大振
はならずしなし畢竟今時の人乃仁義の名は結構なるとめし

いつもおそろしきことにあらずして。宋以来。人欲を絶滅しつくし本性に
立かへるを。学問の極とせしまでならずなく。聖賢のいはゆる
仁といふものを。即本性の異名なりとおもひとはてあるさまなく
の説出来たり。そのゆゑ聖賢の書を玩索して知るべし

仁義礼智　凡二十六則

仁義礼智の四字を並べいふことは。孟子に始まりて見えたり。天下
萬世の人此四字の字のうへにさまざまの説ありてなくならずして。これをとなへ天
下の生通道となふ。孟子以来漢唐の諸儒。宋朝の濂渓周子
にいたるまで。これを道の名とせり。程伊川の好学論に云。天
性具五常（ゴジヤウ）曰仁義礼智信と。これより以来代々みなと人に備はる性の
名と定めては。聖人の意にそむけり。程子以前は鄭玄中

庸の註。あらひは韓退之の原性に。されを性といへども。されは氣質の上より清ゐて性といつて。宋儒のことく本然の性は傳る理といふことなり

先儒の說は次為。天は元亨利貞の理ありて。四時は流行して又行の理となる。人は理をうけて。仁義礼智の性となる。是を本然の性といふ。大學章句序云。蓋自天降生民則既莫不与之以仁義礼智之性矣。小學題辭云。元亨利貞天之常。仁義礼智人性之綱と是なり。然れども是を定て人は傳る又性といふとれは。經書の中に引合せて齟齬することなし。何そなれは此又ゆのものなりとさて傳りて人は傳りてあるものなりは。一ツを傳してもあまり。一ツをかれてもたらへは

人は又膳六腑の傳りてあるかことく。一ツを傳ることもなく。一ツをかくこともなくさるものなり。然るに堯舜のとれはいまた仁義の目あらはれさせ。其後二千年を經て。孔子はいてりてもし先て仁智となる人の事ふ。中庸は仁義礼とあり。孟子はいてりて仁義礼智の目傳せり。漢儒董仲舒揚雄は及ぶ。信をそへて。されを又常と云。もし人の又膳のことく。かなりて傳りてあるものなりは。上古より以來。堯舜孔子の聖。何を以てかこれをのこまはさして。漢儒董仲舒揚雄の少まはいてりて。されを見出さんや。人は定りある性の名といふは。おろへ如これとなり

且又仁義礼智信の又ゆの物なりは人の性なりは。其他のものは配當しかたれことなり。然るに聖賢のことなくは配合

して詳畧多少はことに一概にあらず。先又うてかへし。何そ
ゆゑは中庸に智仁勇とあり。大學に仁敬孝慈信とあり。孟子
に又仁義忠信とあり。仁義礼智樂ともあり。易の系辭に敬以直
内義以方外とあり。論語に君子義以為質礼以行之孫以出
之信以成之とあり。周礼に智仁聖義忠和とあり。此外仁義に
配當しかく條目を立つることあまたて經書に見えたり。勇と
云。敬と云。忠信と云。忠和といふの類。性の名にあらず。志なり
經書に稼くに配當しかく。ぞしへを立てるからは仁義礼智信
の又いはうりと人に備る性といふ為からさることは分明なり。勇
敬忠和等の目を又人の性とも志なりし。此れ又身看にあら
ずや

然らば聖賢の書に仁義等の名目さまくにかくて一定なるさう
ことは何の故そや。曰聖人のそしへをまふくるはたゞ人は良醫は茶
方を配合するかことし。人の病に内外虚実の差あるべき。其説
同しからず。水土の変古今の運。四時寒暑の気候はことなり。一
概に定めたし。又面々の料等趣向も一同ならず。然るゆへに古
今さまくの方剤あるべく。各病をいやすものあるしあり。聖人の
をしへをまたしあらず。人々の疾接一概ならずして性分のうち
せうも又さまくなり。たゞ一字をはなり一言を得てきむこ
とにあらず。人はひろく慈愛せざるはなかなさるによつて仁
と説く。生死取予の間にはそうなくんはあるべからざるなり
よつて義と説く。物にはいつ程等なくんはあるべからざるなり

よつて礼と説く。来の上にはは是非善悪を差別せしめんはあるゆゑにうさるによつて智と説。又仁義の善なることを志るといへ
ともいさゝ浮むことなかれはかなさるかによつて勇と説
く。何れも彼是拵合ふく名目を立ちれ。或は仁智と説さ。或
は智仁勇と説さ。或は仁義礼と説さ。或は仁義礼楽と兼挙
け。其外ふくの智らあり。仁義礼智といふも即其内事なり。武経
には智信勇仁義の五ツを将の徳とす。これを聖書にあれと
あれとも。武将の方にはかくのことくくに合せてるなれ也なり。
其内仁義礼智といへは貴賤上下に通し。かへられさることなり
ゆへり。後世まゝこれを使りて傳ふ。礼記喪服四制篇に仁義
礼智人の具矣といへるなり。性に備りてる未發の理なり

あらす

仁義礼智に信を加へてこれ常といふことは上に挙る通りなり。
前漢書董仲舒の傳にもしまたくあらる。揚子雲法云にも
まさしいへり。古註を考ふるに。其の五行に配當したるものなり。
朱子の大抵只解に至て。健順五常之性とあり。これは陰陽五行
に配當したるものなり。此に事古昔聖賢のいはるゝことを辨
せしに上に詳にす。其内漢唐の儒者より宋の周子に於ては
徳と見たくいまて性の名と云ることなし。通書に徳を曰仁宜
曰義理曰礼通曰智守曰信といふ是なり。韓退之の原性にこれを
五性といへとも。気質の性乃上にて出せとはらくいまて本然の
説なし。程子の好学論に五性と定られたるより以来人に具る

本徳の理といふは大は聖人の旨は少なり
程子曰四端不言信者既有誠人為四端則信在其中矣朱子
曰四端之信於又行之土而水火金木無不待是以生者此言
仁義礼智也後ことに分れ其理なるにあらずして此四のものを
後ことにあらずと信といふ又行の土はよりて形をなせ四時より去
用のあるにしたがひ別に一物あつて仁義礼智と並称するにあら
次し忠信約信の信とは各別同しからず性理字義は又常に
信以人言実理而言忠信之信以言之実而言と見なり然
其ことも古聖人のことばを考ふるに言忠信信近於義の類
何其ことのたづまちからさうと信といふ四書六経の内一句も仁
義礼智の実理を信といふことなし聖賢のとしへ其ことに仁義

礼智とあるは自実徳なり信を加へてもし絶て実徳なんや
或は仁をなしてなしからさうは假仁と云色取仁と云義をなして
後ことなりさうは義襲と云ことなり信をなることを得ること
漢傷己来周子に至るまでは仁義礼智信と並へ称せらるなれ
ことも信の一字程朱子の説ともなり漢傷は信をもて忠信
約信の信と見たるものなり揚子法言は仁宅や義路や礼服
や智場や信符やといへり符といふは符のすなれは約信
の信と云へし周子の通書は守曰信とあり信を得るなと
いふことは見まて約信を守ることなり何其も仁義礼智の実
理とするにあらず大抵初学の少なれは宋朝己来の註解義疏は
なりを見たく何ことも三代よりさのかたしかくのことしと知りひ少

を議論のたゞひあれは大きはしらさ。おさゝうとなきてく多し。
學問の次第條目を古今の名さゝ變易ありて三代以來
漢唐宋を始めてまゝく。世々の變革一なりとして光傷の見所
を人々同じ如次。宋朝理學の法傷の中にくを。主を同じ如次。
周子程子朱子。何れも其間多きことなり。信を實理と見を
しゝ約信と見るとしは周子の說漢唐の諸傷と同じ如ことに
て。程朱子とことなり。其を一端なり。他事の其間をし志
なへし
或人曰。聖人のをしへ。医師の方を配さるゝ如くなれは信を
約信と見るとしは仁義礼智を配當せしを。くるしかるまじく
哉。曰。然り。志かれしを仁義礼智は下の人乃のうまれ有る也

は孟子は並あらくのさまひ。四端をはくそれとし次。信といふとは
そうとも其法なれとも。恭と云寛と云のたくひにて。百行のう
と志かし。言不必信。行不必果と云。信近於義言可復やといふ
のたくひにて。信ならはては。事に弊多れとしあるにしらく。仁義
礼智を配當志かれなるへし
孔子は常に仁智と称せしを。又は智仁勇とのたまひて。仁義と
あらせてをしへらることなし。孟子中庸易の說卦を仁義といへ
ると。老子莊子の書にも。仁義と連用くいへると。然れはたゞ當時り。
誰とものなしに配當しゝ。世間を通用していひふしたると見
てしら。孟子は仁義とあるを志てかゝ無くして語るものにては
しれて料簡を作て言ふしたるにあらず。其間を仁智とあ

なれば成德の上に行ふべくいふ。仁者安仁。智者利仁といふことは
おもなり。仁義とあるは凡人なるものゝ。よくされはかなかるの為。故
曰。立人とは曰仁与義。又曰。居仁由義大人之事使矣とも見なり。
仁礼とあるは人に備はる上に於ていふ。故曰以仁存心。以礼存心と
いふことは見なり。其辨別を志ることはあるべからず
義といふは進退五捨生死得失の上に於てこそ可不可の差別
を考へてこれを行ふの為なり。孟子に人皆有所不為。達之於其
所為義也。又曰。羞悪之心義之端也。此等のことはいふまでもなし
て。其義を推知るべし。朱子曰。義者心之制。事之宜也。是を
義と人の性とはしてもなきにより。かくのごとく註せり。義は心を制
するのみといふことはなるべし。さらに使る制の理といふはなるべし

かくして
義を事之宜也と解すること。本中庸の義者宜也といふより
いでたることなり。後代をかゝる此註を用ることなれども。此分にてもつ
れて。惣別古書に同音の字をかりて其義訓を解する例多
きことなり。何事も一通りの義を明しうるのにて。全くこれ義
を行ふことにあらず。論語に政者正也。孟子に征者正也。中庸に誠
自成也。而道自行也。又齊之為言齊也。礼者履也といふの類。何事も
同じ礼なり。政は身を正するの根本なるといふことを明さんとして政者
正也とあれども。政の字をもとにして正しくいふ事なり。
あり。義を宜也といふことは是なり
仁ありて義なれどこれは。孟子兼愛の說に流る。義ありて仁

あれとこれ揚子雲家の說よ隔つ。故よ至人のみ仁義礼二つのものありとせず。一倫の弊多し。今一事ふつるくいつくり。多く而不編(ヘンセ)不射(ヤ)為(ヲ)と不仁あるものよ至らざるところあり。故よ君子の上ふくぶかくしてそこよ至らざるところなし。聖人のみ仁義兼ね備へ中庸盛徳の書に仁のことのみ説くこと多く、義のことを説くこと少なく、義おいてをや。又曰賢為(ヲ)大(タイト)とあり。孟子ふかい後に義や。又曰人皆有不為(ヲ)達(ニ)不為(ヲ)義(ニ)や。又曰人皆有不忍(ニ)人之心(ヲ)とこれを説きて為義(ニ)の端(ハシ)とせり。仁義の二字ともに人心よ具はりてしかも仁よ重きこと義よ重きこと又明らかなり。

仁義の名義

仁義の名義よ至りては、諸儒の説多くは仁義の性よ就きてこれを言へり。今一事ふつるくいつくり。多く而不編(ヘンセ)不射(ヤ)為(ヲ)と不仁あるものよ至らざるところあり。故よ君子の上ふくぶかくしてそこよ至らざるところなし。聖人のみ仁義兼ね備へ中庸盛徳の書に仁のことのみ説くこと多く、義のことを説くこと少なく、義おいてをや。又曰賢為(ヲ)大(タイト)とあり。孟子ふかい後に義や。又曰人皆有不為(ヲ)達(ニ)不為(ヲ)義(ニ)や。又曰人皆有不忍(ニ)人之心(ヲ)とこれを説きて為義(ニ)の端(ハシ)とせり。仁義の二字ともに人心よ具はりてしかも仁よ重きこと義よ重きこと又明らかなり。

仁義の名義よ至りては、諸儒の説多くは仁義の性よ就きてこれを言へり。今一事ふつるくいつくり。多く而不編(ヘンセ)不射(ヤ)為(ヲ)と不仁あるものよ至らざるところあり。故よ君子の上ふくぶかくしてそこよ至らざるところなし。聖人のみ仁義兼ね備へ中庸盛徳の書に仁のことのみ説くこと多く、義のことを説くこと少なく、義おいてをや。又曰賢為(ヲ)大(タイト)とあり。孟子ふかい後に義や。又曰人皆有不為(ヲ)達(ニ)不為(ヲ)義(ニ)や。又曰人皆有不忍(ニ)人之心(ヲ)とこれを説きて為義(ニ)の端(ハシ)とせり。仁義の二字ともに人心よ具はりてしかも仁よ重きこと義よ重きこと又明らかなり。

にもとあり。古書にかくのごとく用ひ来る例多ければ。仁内
義外といふことを知らでハ叶ふまじ。仁ハ我が心にて義ハ先行
にさして疑ふべくもなく。心に本づくの意別にあるを説
按ハ。孟子告子を難じて曰く。何以謂仁内義外也。告子
が答に曰。吾弟則愛之。秦人之弟則不愛也。是以我為悦者也。
故謂之内。長楚人之長。亦長吾之長。是以長為悦者也。故
謂之外也といへり。此意ハ吾弟ハ我身に愛さるゝ故人に愛し。
人之弟ハ吾身に愛さゝる故に愛せざると。強まハ愛しむるものハ家
のすこしたるものの無きハ。仁を内とする也。長者となる徳に
てハ。何の兄伯叔にてもあれ。他人の兄伯叔にても。吾より年たけ
たるものハや。何にても長を長とし従ふハ吾身に従ふとして

先にあるなり。是によりて義を外とハいへり。心よりおこることを以て
内外とハ分つにおよばざることなり。此の章に委く明なり
告子内外の説。上に論ずる如くなり。独り孟子に仁内といへる言
余せる也。然しながら義外といへるを破せられたり。仁ハ内といへるハ。
孟子もこれを是としたまへり。告子がいはく、仁を直に性といへるハ
あやまり也。何となれば。告子食色性也。仁内也。義外也
非内也といふて食色ハ性といひ。仁ハ内といへれハ内と性と意
別にありと見えたり。独りこれハ孟子の義外を非として答へし
を。仁義を性と見んとするにしもあらざれバ同からず
大抵孟子仁義を内とせられたるハ。仁義ハ天下の大徳なれバ。其の元ハ
吾心より出るを知らしめんとなり。吾長を内として長者義乎。長之

者義乎といひ。行者敬故謂之内やといふの類にて見るべし。
先儒の註解には行者敬敬之とあり。其是を内と直よん
といへるものにて。孟子の意にあらず。畢竟告子の意にて
義といふものはもとよりのことなり。かさねにて世に意をもつ内くの
所とおもへるによりて。孟子はこれを弁せらる。後世にも
義を性にあらずとせるを義外といふはあることを。且學問讀書
を廢却することを義外といふはいふにあらざることなり
礼といふは大にしては貴賤の卑の別。居處衣服を制。小にして
は言語動作を別。揖讓進退の度。其他くの次第あるをさし
ていふ。周礼等六官は文武周公ことを治るの礼なり。為國以礼
といふは一國を治るの礼なり。克己復礼といふは一成を治るの礼な

ま。經書に所謂礼といふものの皆此ことなり。後世理學さんなるよりて礼
を理と見て。仁義智に配して人の性の理といふはあやまりなり
論語集註に礼者ことに理を節文。人事を儀則やと註せ。
ま其は大畧礼にてなる註なり。然れとも礼を人の性と見る
まてるゆへにて理といふことを註せらるゝは古人のことにあらず。其礼
にあらず。克己復礼を解して勝私欲而復礼則事皆天理をく
と註せらるゝは大にあやまりなり。四書六經の内。礼といふことは何れも
礼法礼儀のことといふ。一句も理を礼といふことなし。先儒のことにて
を克己復礼の章なし一句所なりにて。他の章は何れも礼
儀のことなり。然れは礼を解して理といふはあらざることを知
るべし

聖人仁と礼とをあはせ挙らるゝの事ハ多し。克己復礼為仁
とのたまへる故に。仁存すれハ礼存す。とのたまへる。人而不仁如礼何とのたまへる。
ひさる事ハ。仁ハ広く物を兼し。礼ハその次第あることをいふなり。広
く人を兼しても。又其内に次第程節あることを克己復礼と
前に論するところなり。又説経に礼儀三百あつて仁ならざるはなきハ。
表向かるの形儀にして。其中に悉く仁をふくむゆへに。人而不仁如礼何の事ハ。
程子の所謂有関雎麟趾之意。而後可以行周官法度といふの
意をもふくむことなり。其ほかにても聖人の心ハ。仁礼の本末のこと也。
互に相維持してをのつから表裏をなすなし。大概微賤の人ハ。
むつまじけれどハおもふも礼儀をわきまへぬことおほし。富貴
の上にハ礼儀格式きひしくしくして。備理の間に意をあつるところ

たるゝこと多し。故に礼を行ふにも仁を本とせずんハあるへ
からず。予故に思へらく。有仁者礼則凡節皆合。有礼而
無仁則儀格ある不親と。聖経の上旨をかんかへてしるべし。
畢竟礼といふものハ。仁義を節文したるものなり。人の仁義
あるハ天の陰陽あるがごとく。ばかりの序を指して礼といふ。智
と次第し。智ハしかく出礼とする。中庸孟子に載るところを考て
しるべし。ひとつ仁の條下に詳に論するところ。これハ再ひ言を待
あらずと。猶且ハ後世に仁義礼智の四つを四時に配して。人
の性の理とするにいたりしハなほなるところ見るべし。
聖人の言ハ。礼と義と並べ挙るもの。親規矩準縄ともを故礼
義の並べをとり挙るのこと多し。孟子に。義ハ路也。礼ハ門

や。君子由此路而出入行門とあり。又進以礼。退以義とあり。いんとなれば。信と云恭と云直と云勇と云の類。何れもとられてとなれども。礼義はかかはれはよろしからず。故に有子曰。信近於義言可復也。恭近於礼遠恥辱也。因不失其親亦可宗也といへり。ひらすれば信は人と約束して相違なれども。恭は人に對しくいんぎんなることゝ。何れもとられてあり。猶れとも人と物ことを約束するも理をなかしてしく。そこらに約束を誤るとれば。後はいふ事なりにあらざるにあらず。後悔するとあり。まさく人はいんぎんなるも。なまれたくいんぎんなるは。かへりてまつりし先をとることあり。猶るにあらず。信を義にそれせり。恭を礼にちかれせりしとれば。そこにしたがふとふ行也。

まつりし先をとることなし。是にくは先かたれよさ人といふ也。その人は和気あつくしたしむ事れ人はいかくしたつとへ事れ也なり。又夫子曰。恭なる無礼則労慎なる無礼則葸勇なる無礼則乱直なる無礼則絞。孟子曰。大人者言不必信。行不必果。唯義之所在といへり。ものをもつ事れ事なり。猶れは義なるの上。礼義を以てのりとして。ぢれはたかはさるにせりといふことにて。仁義礼智は家性に備りたる理にて。無欲清淨にして本に立かへるにあらざることゝとしたる人し

復礼といふと。後世復性復初の本と。猶れとも。左にはあらず。復は反復の義なり。物ことを何事んをうちへしりくしてなり。易の乾文言に。終日乾々反復乃やとあり。即此義なり。此の事性也

條下復性の説に詳にあらはせり。おのおの見るべし

智の義これにて知るべし。されど詳なる事は前にいへるがごとし。孟子曰。

是非之心智之端也。又曰。智之實知斯二者而弗去是也。智は

の事にくはしくそのかく較あるべし。先儒分別是非底理と註

せられしを性とみえたる註されしを天下の事を見えたる時は。

此註にくはしくもたりて明らかなり

仁義礼の三つのこれとて天下の道なるまでは。人々を得られず

を。智は人の智恵才智のことなるゆゑに。人々をそのならしてもしく

故に天下の道なるといふを治めて。鮮くして多し。是も沿襲

の見えたり。智と共に仁義を合してもしくちなるべし。

總別の義にて人の知るにある所の名なり。今日の術上下の

人朝夕に用ひ知らずして皆な有る事を行ひながら仁義礼智

とは知らず。故に易に曰。仁者見之謂之仁。知者見之謂之知。百姓

日用而不知。といへるは。今日の人の上に就て見るによくさ

ア高の族。朝夕に行ふ職業に骨をさらし。父母妻子をそだて

みやしなふ事は人の有るなり。仁徳あつき人の事とみえ。かの

しれるものはしれたる家内のことをよくおさむは仁しぜんに智

徳ある人の事とみえ。かくのごとくせざる人はそれまでなること

あるは智とおもふ人なり。然るにおもしろきことに仁

を智とするのみならずなす人も足るを。百姓日用而不知といふ。

然れば所謂智といふものも。是人の知るにあらざるの名にて

て仁義礼智をしらずしてあるべし。又論語に好知不好学。

こゝ蔽や蕩しあり。これ又誰とへし。智と志のむしといふを好仁好礼
といふとほしれしふく。こゝろとぢとこれ志のむしてあり。けの性
に倚りたる理なれば志のむしとは云かたし
世俗の人の大智と称ふは。其他の外古今の終始をも見通し。萬
人にすぐれたく。ひとりこゝ理をあれらむると望人と称ふ。志是
俗の見矣。猶のみなり。望人の大智とるゆゑんは廣く衆人の
智をとり用ると云ふ。大智とは。こゝ法にむる所は人偏日用にあ
けり大切なることを先務とす。獨智を以て。天下古今萬物
萬事の理を志りさかむるにあらず。故に中庸に云。舜は大知
や与。舜好問而好察通言。孟子にも又云。取人以為善とす。
此等のことは。廣く人の智をとり用ることをいへり。尚ほ云。

堯舜は知而不徧物。急先務也といへり。志是その智といふこと。人
偏日用の急務を法にむることをいへり。志是らにて望人かは
なり智といふこと志るべし
大抵世間のこと。一人の力のよく法にすることにあらず。
ていやしく愚なるものよく志ることに。望賢君子の氣の
付きることあり。然るゆゑにあまねく人の智をこれ用ひて。その
善を擇て志れを行ふ。たゞ人は子諸侯の所は諸万人の力をあ
つせてこれを力とし。然るにありて家國強兵といふことし。智は人より
なることを。志是をけの所にこれにけの智なり。人の智をあ
てけの智とし。然るゆゑにこれは智大なり。故に學をもの諫をう
ちて。こゝ智を大にす。古人より望人あまたなれども。舜はこれに

人の善を用ひさるゝよりつゝく。大智し称せ。志をふよりつゝく
志る。獨智をたのゝしく。凡人のことをさとるは智まあらず

訓幼字義卷之三終

訓幼字義卷之四

中 并 中庸　凡六則

聖賢の書に。或は中と云。或は中庸と云。二ちのことに同じ。然るの内にて少者別あり。中と云は物の中道をさしたくいふ。是ことなく不及ことなきことなれかがんなるところをいふ。中庸といふは。左通不及なきことなれども。其内は平易従容にして。目をおとろし耳にたつことなくいつもとくなるを中庸といふなり。各其前の文は志をつくかんへ志るべし。後世は一理の名にして。未發已發の説あれども。古人の旨はあらず。中といふことは。然るに堯の位を舜は禪ことなるは。允執其中といへつゝ。其後舜の位を禹に禪り

給ふ事も又かくいへるこそあれらかは論語にのせり。後世
宋儒の説にハ古より聖人の伐く偽挍しるゝ法乃統の旨
ならく。子思子ハ偽をうしなかんことをうせへて中庸を作るく
いへハいふうし。中とし中庸との差別上に論ずる通りなり。其上唐
虞三代の時ハ風俗淳厚にしてく。仁義の法あまり称しとしへ
しとも。教法の條目ハ後世周の世乃時分のことく詳なることを
そ是ゆへそのかゝハ仁義礼智の目さへたゝ須。第るまたゝ知れ
かんにあることもなく不及ことをなれやうにせんとしへ示さる。
允執其中といへハ此ことなり。元の王耕野讀書管見に云く
所謂中者豈真有高遠難行之事。非聖人不可企及邪。
今恒言俗語於事當其可者則謂之中其不可者則謂之不

中。雖愚夫愚婦皆能言之。又何有偽挍之法之秘。此説ことなり。後世の
理の学さんなるにより。乃法教法の名目を皆ゆへ具るの理とそてたる
ゆへに中を未發のゝ体として聖人相偽の法といへハ大に古
義なりそむかり

人のゝきさなくなり。其性淡泊なる生付ハたゝことをしてなく
なことをなく。妻子眷属をもいとひうしむしろあり。又強盛
多欲なる生れ付きハ廣く奢色をいとなゝ。器物家宅等の
をあくことなくなりし免むさなるものなり。其是皆過不及なり。各
面々の生れ付の通ハ行ふことハ淡泊なるものハ淡泊をよし
とせりひ。多欲なるものハ多欲をよしとせりふ。其是ならくハ一
下の人面々さかれまなりて。一同の為といふものにあらず。よれか

道の中庸あるべきを人々定本としてたてる道のハひろし。
不及道のハ行はれざるゆゑに世人に示さる中庸
に云。道之不行也我知之矣。知者過之愚者不及也。道之不明
也我知之矣。賢者過之不肖者不及也。堯舜の允執其中
といひ湯の執中何れも此の事を説して見へたり
後世の説にハ人の過不及あるところハ関の上にかく心の本体
未発の中にハ過不及なしといへる文字を議するものハ心の安
なる所を尽し扨発しては上より見れバ賢愚智不
肖のたがひの平生人の上にハ過不及あるのとあるを面々のなし
扨をひんとハ安なる所にハ道をなさしくの過不及あるく一同なり
も揚子ハ為我と中庸を執のひ墨子ハ兼愛を中庸と執のひ。

んずまじく後世ハ不安しく常理を行へしも聖人のなかうくとれハ
甚しきも過不及なく中にあり。流に出ても又君臣父子の親を
おこなひなをそのまへ万事をなおれハ自然
と備りてあり。たとへハ夫婦兄弟朋友の大倫より凡人倫の中なり。
古今のちかひなく貴賤賢愚の差別なく常理をおこなふべし。
かくの中にあり。流出常理といふも中にあり。流出れをもふるも
中にあり。流出ハ中より出るものハ自然のものなれバ人心の法
則ならバ人の安きところをなしてハあるに
未発已発といふても中庸にあるは常理を聖人のしるしとの
ゆゑなし。何れも已発の上にハ然く未発の説なれバ人心の條
下に詳にいふ故ならず、そを上未発の中をとらしれハさだかく

さることくしあり。礼記等の書を考へみるに此四十七、字にありて樂の徳を賛したるのみならず中の法をいふなあらん。何となれば樂といふものは人の喜怒哀樂をうごかしふるものなり。其聲の清濁高下のそろひなくしては和を中となすに温和ならず。敗るゝことなくしてかくのごとく和にして其あるべしといふ。これは天地を動かし鬼神を感ずるの妙ある物の四十七字此ことを述べてある。礼記樂記篇を考ふるに夫民有血氣心知之性而無哀樂喜怒之常。其の下に樂のことをいへる。又云樂者天地之命、中和之紀、人情之所不能免也。又云動而天地應焉、四時和焉、星辰理焉、萬物育焉。又云大樂與天地同和。又云。樂者天地之和也とあるのそろひあまくなる。周

礼大司樂以樂徳教國子中和祇庸孝友とあり。漢書兒寛が傳にも樂のことを称美して惟天子建中和之極。又樂は中和樂といふ樂あり。礼記おもおかせらんとする樂のことを中和といふ。説授名して按ずるに此四十七字は樂のことを称ふるものにて人の心の上にあるべき所なり。故に中庸にも此所なればなく、おもふ中和といふて再びふるも其に深く述ぶとあるべし。その詳なることは先人中庸發揮に其事を論せり。唐虞の時ははじめより中をもってしへとして孔孟のことなりしかれ中にはそのふてを悪とならず其上は唐虞の作より聖人となりて聖人のことを行ひするを所謂由仁義行、非行仁義也とみえあらそひも決して中とたいありけれせずして自則に

れとあり。堯舜の允執其中。湯の執中のことはまもなり。常
底の人中とはかりん得てハ。治法としてとり志ゆくれことあ
ゆ。そもゆへは孔子ハ。まつら礼と義とを以てをしへと志るゆへまた
孟子に。執中無權猶執一やとあり。何ものも此ことあり。論孟
の中。偶中とあるハ。大かた人かゝの上は然るのゆへ中や養不
中といひ。不得中行之士といふのこゝひまくしるへし

誠　凡又則

誠といふハ。もしいつゝのなれてしぞの反對といふこれハ誠偽と云。
聖人分上はあつていふこれハ。月法の実法といふ。信の字と訓ハ
同れとなれとも。よりて差別あり。信ハ一法にして。言行の上は相違
なきことあり。後ゆへは信ゆゑにくハ時によりて弊あり。誠

といふハ。表実無偽のことなれハ。実法の表裏透徹しなく。さとし
を他意なれてしなり。信の字よりよりて立ありうる場やたく
いつゝといかぬとゆゑのことにあらず。後世は及ぶ。天地萬物は
偽りの実理をさしてく誠といふハあらず。ものを実務の理をさ
していひたるものにて。古聖賢の意はあらず
論語は誠の字なし。詩經を引く。誠不以富といふことあり。
ハて虚字にて。誠信のことにあらず。然れとも夫子の「言一
行。誠はあらずといふことなし。たゞ人ハ堯舜の仁ハてもはあまり孫け
れとも。その如き仁を以てをしへとせらることなれかたし。もし
より言聖の有無はかゝることなし。そのゝ中庸孟子に屢誠
とのたまふ。又夫子のをしへと外にしてく別はいひあらざるなり

あらはす夫子の意をあらはすのみなり
誠者天之道也。誠之者人之道也。此語中庸にいつもしるを。
本夫子哀公に答へ給ふことなり。然もしるを孟子にもしの
語ありて。孔子曰し標おせしもしと。とうく當時聖門傳誦のと
しへと見えたり。誠者天之道也。といふは聖人の德自然にして
作意なきことをいふ。誠之者人之道也。とは賢人の德学問修
なしとくいふとをいふ。孟子に思誠とあるを同じ意なり。それ
ゆへ下の句に。誠者不勉而中不思而得。從容中道聖人也。と
いへり。そうあるを分明なり。然もしるの上に然るを自然なるを
天道といふ。作意をまつらんと人といふ。古書に此例多し。孟子に
天爵人爵といふ。後世にも韓文に不有人禍必有天刑といふ。行

もしるを此ことなり。本文を玩味して自ありし
章句に。誠者真実無妄之謂。天理之本然也。聖人之德
とく亦天之道也。孟子集註に。誠者理之在我者。皆実而無
偽。天道之本然也。思誠者欲此理之在我者皆実而無偽。人
道之當然也。といへり。然もは真実無妄の天理をさしてく誠と
いふ。中庸の註にくはしくしるの上に然て説ゆへに聖人の德も亦
天之道也。といへり。孟子の註にては人にそなはりたる天理をいふ。
即性なり。天道聖人のことにあらはす。それゆへに思誠と解して。
此理之在我者皆実にしていつはりなくんことを欲をしいへり。
畢竟所謂無極大極の真体をさしてく。人に各具るの大極と
いふものなり。この説甚る上にもとれて。子思孟子の本意にあらず

也。惣別宋朝三朱の学問の旨ふくハ聖賢の書よある許
多の名目ハ固條皆一つの理を極しているものにて。時よりて
に随て名を人号をあらはしてあるものにて。是と別るにあら
ず。天と云。命と云。大虚と云。大極と云。乃と云。理と云。体といひ。
元と云。中と云。誠と云。心と云。性と云。仁と云。明徳と云。一貫の一。
格物の物。ことゆふハかれしとも。皆一理の別名なり。聖賢の人ととも
しゆる簡易明白にして。人のしりやすく従やすからんことを和
ひ為へ何をやはしれしに招くの名目を立人をくてしゆふの費
をなさん。人々の品一端なるさるにようて。世間の名目をさなく
あれハ出れよりて又を人を立て出てるものなり。是故自然より
名目ひとつなるを。後世理といふものを極しく。萬物の源とも

なるようて。許多の名目を強りて一理に帰し。遂にかくのこ
とく解せるゝ。それゆへに仁と一といふてもよし。命といふても
よし。性を理といふてもよし。乃といふてもよし。格物を理と。
意心知性といふてもよし。明善誠化と誠意正心といふても
よし。さなくのこと混同にしてあし。或ハ天人にはなく
ちれを分。或ハ初辞によりて差別せるものとも。ついに弁別
しかたし。是故を考へさんハあるへからしと
誠を真実無妄といふてしハ。易より出つ。易に無妄とも
卦あり。是大象に天下雷行物与無妄といへり。此ものの義に
よりて。誠の字を無妄と訓す。程子の初爻をといふもこれより
いつ。無妄の卦ハ上ハ乾の卦下ハ震の卦なり。乾の象をとりし震

の徳を初よりおはりまでつらぬく。誠の義と發明せ
らるゝなり。語孟字義に於ても、実は无妄なり、実は
無偽と解せられたるは、さもあるべき事なれども、
妄といふは物のみだりに違のあることにて、偽は物のいつはりたるにて
のあることなり。天の不変をいふに、霜雷日月薄蝕の類、常度あり
たがふことあるとも、安排作為のはなくしてなれば、無偽こ
とはいふべし。字義なりとも、くはしく詳にせられたる論なりとはいひ
がたしと賛せらる

忠信　凡三則

忠信二字の事、上にもくはしく解するがごとく、人の流れを
忠といひ物にして相違なきを信といふ。名は一様なり。故に子以

四教文行忠信と係たるも、忠も信も、ひとつにしてはなれがたく、常
に連綿してをしへらるゝことも多し。故に言忠信、主忠信といへるの
類、多く語孟の内にあり。されども後の人は今の人のいはゆる
律義といふごとく、朴実なるものにして、礼記に忠信之人可
以学礼といふも、さもありなんとかぞへらるゝ人をいふ。語
孟字義に忠信二字有朴実不事文飾之意と註せり。
伊川の云、盡己之謂忠、以実之謂信。論語三省の章の集註に
これを用ゆ。明道の云、發己自盡為忠、循物無違為信と。大
学章句の末章に此を用ゆ。北渓字義にこれを判断して
いはく、伊川説得簡要確実、明道説得發越條暢と。又いはく、
此二説はあはせ考へて、その義備はるとし、この内伊川の語

さるゆゑなり。語孟字義ものこまかに二程全書を考ふべし。
此二語によりて此理のしるべきことなり。此書を考ふべし。
一つのことを一義にて済さざるやうにすべしとみえ
たり
或人の云。先儒の学。一家各一家の主意ありて。朱晦庵は居敬窮理を
旨とし。陸象山は先立乎其大者と旨とし。王陽明は致良知を以
てむねとせられたり。其外の先儒みな各学文一筋のてがゝりのあるなり。古
学の意見にては人倫日用を以て。仁義忠信を以てむねとす。一
とすることはなきにあらず。手がゝりとするものにあらず。一箇のてがゝり
をもうけずしてみえたり。又或人の云。古学の主意といふは何を
主忠信をもつて一箇のてがゝりとしてむねとす。文字は主忠信也

みだりに何事を聞えたるのみなり。此事を後世学問のおしえなる
ものゝ類なく。古聖賢のをしへと申すべくもおもはるゝ一箇のてがゝり
となるべき事を守るによりて見えたり。主忠信をもつてしては。王は賓
に対するときは。敬するの上忠信をもつて本とし済まして。ことわる
ものは此事を一箇のてがゝりとして。常に此事を守るべくしていて
ことなきなり。論語にも主忠信。徙義とてあり。又十室之
邑必有忠信如丘者焉。不如丘之好学也とあれば。忠信
ばかりにてはなきことを了解すべし。大に懲別論孟の内にて只だ
一箇にてさむと見えたることなし。堯舜之道孝弟而已矣
といへり。夫子之道忠恕而已矣といへり。学問之道無他求
其放心而已矣といへり。君子去仁悪乎成名といへり。可

終身行之者其恕乎といへるも。其字のいへる経ふ字なくは何ぞよれ
てもたゞ一つの字を終身の受用とはなしかたし。通用して以
これは忍功為學を功と為むとたとへは衣食住のそなはるも。
皆一所にあつまりてあるにより寒暑晝夜内外表裏の
差別あるゆへ一つの字をもてはたらかぬなり。聖賢のをしへも
かくのごとく事にその應接にあたりてはかならず一法を守る一事に
統べくもあらず。その志すところといふときは心と其ゆ
くを本とむると至極の所にいたりては仁義を以て人道のかな
め。能る受用の上には恭敬忠恕忠信篤のをしへをうく
しもあらず同じかる。是を内にて忠信を第一とするのは忠
信をよく須ひの事とあるは後世の人理の学をなすよしなく。

百行の事と一ツにまかせてはなく一箇の字がちからある聖賢のをしへなれ。
字をかのごとく仁を心ならべて次だいにひろめてうと宗
としてて常に行ふところなれは君子の教をうけてたもち
つとめて徳を成就すべし

忠恕 凡九則

忠といふは人に対して棄まことつくしてその為をなすといふ。
恕といふは人のこゝろをとしはかり宥恕するやうなり。先儒謝上
蔡云。忠恕猶形影。陳北渓云。忠恕只是一物。就中截作両片。
則為二物。又云。忠是在己底。恕是及人底とあるも畢竟忠
恕は各是一事にして人に交る上に能きことにて聖賢の言をよく
かへりみるへし

忠恕二字の解。程子云。尽己之謂忠。推己之謂恕。尽己
と忠とハ、このこゝろをすこしも残さずつくしきわむるなり。推己と恕とハ、不
当なりとも、己をおしはかりて人に及ぼす、わがこゝろの
われひとつにして人をおもひやる事、推量して、こゝろざ
すなり。所謂己所不欲勿施於人といふも、即ちこれなり。かく
いふときは恕の名目となる、恕字の訓にして、何ぞやといへば、子貢
の問有一言可以終身行之者乎と問ひしに、夫子のこたへに其恕乎と答へ
給ふ。是次に己所不欲勿施於人といへり。恕の一字ぞ推己及
人の意なれば、夫子の答も其恕乎といひて、よく次の一字を云ひ
てはなほ恕乎といひて。又己所不欲勿施於人といへるなれ。
己所不欲勿施於人といふは恕と名づくるの注なれば恕の字の義にあら

ざることを知るべし。又中庸に忠恕違道不遠とあるをも、下にも
又施諸己而不願亦勿施於人といへり。彼是ハ推己の義ハ恕の字を説
るにはあらず。又忠の字をもとくべし。彼此あはせ考ふる
に、恕の字ハ推己といふに、うらハ恃人と註せるなりけり。論語註疏
邢昺の説にハ、恕謂忖己度物なりとあり。礼記孔穎達の正義にハ、
恕忖也、忖度其義於人とあり。此等の註文擬ならずあらむ
内忖己といふにあらず、次に忖人といふ事なるべし。
忠恕一貫のこと、学問の蘊奥、聖人の妙旨なれば、初学の容易
に議すべきにあらず。只だ伝ふ先儒の意によりて、聖人
の心を体の一理渾然として用に応ずるは、泛応曲当して名
そのものになし。他のたとへは天地の至誠無息して、その用

のあらわるゝ所。魯獸なほよいてるまうく。萬物各其所を得ること
しし。然るに子ハ學問積累しく。用の上にあるくハ事にし
に精しく察しけれども。かくることハなかれとも。その體者
一に帰する所を志れるにしたがふて。丈子を將有所得ことを志らく。
其名を呼ちく參乎といひ。其事に告ふ事。たゞ人ハ一倉のみて
まとる鐵を持ちく。其事を貫く索を持さるにしたがふ。一條の鐵
さしとあるべきれを洗かゝ志むるこしし。子ハ其事
旨に熟察して。そこやうに反答して唯とのこゝ。たゞ人ハ鷄の卵を
破るに。啐啄同時といふ。母の卵を洗くと。雛の内よりまうあると。
これをたゞ人さるかことし。然るに子ハ門人何謂やと問るなり。
子ハ日比學問積累の功よりうく。そこやうに領兼せらるゝ

とも。門人ハ其積累なるれハ。其事を告るといへとも。其事に及
さることなきハさらべきたらなし。其故學者の業にしたがふ覚
付るまうへ。其名目をかりて。丈子の所忠恕而已矣と答
へるゝ。それゆへ所謂忠恕といへハ。つきにいへる忠恕とハ
同しからず。學者の忠恕あり。聖人の忠恕あり。其他の忠恕あり。
中庸に所謂忠恕のことハ。學者の忠恕にて。己をもして人
に及ぼものことなり。丈子之所忠恕而已矣といへるハ。聖人の忠恕
にて。己をもものことにあらず。忠ハ体にして。聖人のまゝ一理渾
然ることをいふ。恕ハ用にして。從意曲愛することを云。其他
に然るゝハ。一理の萬古ゆるさるハ忠なり。萬物の各其性命
を正しくハ恕なりと。其詳なることハ。集註語類等をしんかへ

為し
曾子の門人に告て忠恕而已矣とのたまへりし別義なし聖人の道
ハ仁より大切なる事ハなし仁とりむつかしきにハ又忠恕よりちかき
事なし故に孟子に強恕而行求仁莫近焉といへり樊遅の
仁を問ける時に夫子の答へにハ居処恭執事敬与人忠なりとハのたまへり夫子
の夫子たる所ハ忠恕而已矣といへるをもつて見るべし人ハ人たるもの
人に対しては兼ても人を愛すべし宥免慈悲ある
徳あらバ此人あつかひもよかるべし独りハ一以貫之の旨をさとく
忠恕而已矣とあるをよくよく独りに後世にいたる学
問する上なるによつて一箇の理をもつて主張し理一分
殊のことを忠恕をもつて説きたまへるなりと思ふべし畢

竟一以貫之とあるにつきてハ此方の事へて一をもつてほそくとし為て
あるしの事ハ至りて近く何をもつて一と云何をもつて貫く
といふ事なし聖賢の身乃全体と合点したる人ハ何くれとなく
分別をせずに其覚悟をもつて覚悟したる人し曾子の唯との事まで知
為し其上其覚悟せぬ人ハ何しても一をもして至りた
るにてハなくとはさまハ言葉ハ何の謂ぞやと問ける事をなし答をも
さしく忠恕而已矣とあるかハ曾子の門人にハ次何程
地位まで至りたる人に告へたるにてもなく是を説二つハあれまし然ハ
学者忠恕の目をもつて一貫の旨をさし決していへバ曾子の
言にあるとハいへんや経書にある忠と云恕と云を説二つハある事し
学者の忠恕聖人の忠恕しるし又かかるべく其義をつくすにある事

てしむることあらんなし

子貢の一言にて終身ほとく行ふべきありやと問ひしに。其恕
平と答へたるに。又仲弓の仁を問ひしに。己所不欲勿施於人
と答へたるに。此れは恕といふことは恕の行ふなれ
は。恕は仁を求るの工夫なるとし。金明らかなり。然れは夫子の所は。忠
恕ふたつ一とし。無りたるといふは疑ひあるまし。仲弓子貢は
聖門の高等ふたつ。顔子弟子に次ぐ人なり。然るに。所を終
ほとくの一語を問ひ。仁を求る工夫を為しかたに。何れも恕をのて
まふ。然れは弟子の門人は。愚昧を及ぶさるに。忠恕を志めさ
るとしいふ事ほとしかれ

中庸は忠恕違乃不遠といふことあり。此れにふたれは忠恕といふ事

のをとくにあらんといふ事を論語は夫子を為忠恕而已矣とあり。
此れはふたれは忠恕をとくにあらんといふ事しは二端同しかたに程子
は矣同を判断しとく。動欲不爾といへり。此れは中庸の忠恕といふ
は学者の修為工夫をいふことなれは。人作ふたく自然有あらん
夫子の忠恕といふは。自然のことなれは。かしこの修為人作をあつ
かうと。故は動欲不爾といふ。動欲矣といふことは。かく易の無妄
の卦よりおこることにて。自然のことを以つて。然れとも此の説は。
上は論語を通りにて。学者忠恕の目をかりて理一分殊先
ことをあらさるといふ説よりおこりて。中庸乃
忠恕と論語の忠恕とかしこりかなることはあるまし。畢竟此
の事は。あらんことを同しかたるにふたりて。かく矣同あり。惣別

なるは道徳の上あり、方法の上あり。天下の事なるといふ忠恕といふ
志於道の類は道徳の上をさしていへる也。此等の類は忠恕違
道不遠といふ事なるべし。其分ならざる事を以て大学にいふ
学問の道としていへり。是は方法の上なり。物の事をさして以て。
夫子の道は忠恕而已矣といふも是なり。孔子の聖人の事にて学者
のよりいへる也。ゆゑに夫子は吾道といはずして、又は吾道といひ又は夫子
之道といふ。然れども忠恕といふ所は其下の忠恕ならずと見
て、何事も夫子何ぞやといふにて、其所は吾等のうへの事なる事を
忠恕と夫子にあらずして夫子の道といふは、独り是は中庸論語の
等に見ゆるにあらず。又是を忠恕とさして示ぬるなり。彼の一貫
の旨をさしたるなり。ゆゑに上忠恕は徳の事なり。これは忠恕をさしむ

ものなるは大ちがひなれども、此の事いはるなり。古人なることを知らずして
寛弘なる意にて翻を逼切なる忠恕とす。是は必ずしも非あるべく
又其らに、さひしくいふも大抵なることをさくして遠なる其の事
之を信近於義といふ。知所先後則近道矣といふと同じ事
なるなり

先儒一貫の説には理一分殊の事をあげ、仁恕生熟の別ある理一
分殊の事をさしていへり。これは随事精察して其の一を志しく
さとし、是は今日の上に能く読書窮理を得て万物の理に
達して一理のところを見得して聖域に至るべし。仁恕生
熟の別よりいへば今日の学者なる上にはそをして人に及ぼし
漸く純熟して以仁及人自然の地位に至るべし。一以二端にし

きを集註すもこ二節の旨へえらひ先儒の意ふまもくひきはりて又ふ
しくれハ居敬窮理と合てはしむかしふ落ちしくなきこともあまたし
あるく仁恕ハ人をおもまむのゝ窮理ハよく〳〵をいさきまするの上
ままふれハもう文用けしかくして古きハ先儒一貫を理一のうちとひ
又恕の字を恕宥恕察の義ありてとりらく引合て解せるも
たらくて見えさら本文ハたく忠恕ふたつ一節ときりまたるし
あることふかまるく別義なし

先儒に仁恕生熟の辨あり。其きハ恕といふハ学者分上のことそ。
己をおしく物に及ぼすことハ力をいるゝ事なり。聖人の上にはてハ自
然に物に及ひくもとして也とも。程子曰以己及物仁也推
己及物恕也。小注汎曰以己者自然推己者著力又曰聖

人の恕便只是仁更不待推して又つを畢竟自然不自然のち
かあるのみ。学者にしてハ聖人の地位にいたらずハ恕といふてハてぬ
ものにて又わりけらの語孟字義に辨して云。聖人豈不以自然
而謂我自己所無不然聖人無所用恕邪。人分上に恕とよ
しくあるまけれや。或云孟子に強恕而求仁莫近焉とあれは。
然らハ仁と恕とハ生熟大小の別ありて恕より仁にいたる
為にさふあるべしや。曰然り。先儒の意ハ仁恕の二を只一物なり
としくて生熟ありとするなり。それを多くいへるは。畢竟
恕といふハ彼るにしくて仁ハ本體の用なり。たゆ人をそしは
て寛免さされハされを責るゆへなりといふ和義をと
あるむくにこそ仁としく恕ぞあるふれを恭敬忠の類

何事もたゞ恕の心をもつて仁を求るの志あることなり。孔子の門弟子の
善く道を行ふの詞を学んで志ある人し。生熟の事にあらず次第をいふ。
子貢の我不欲人之加諸我也吾亦欲無加諸人といひしは子
の語を云に賜也非爾所及也と宣へり。程子仁恕の説あり。集註
に詳なり。無者自然而然勿者禁止之謂此所以為仁恕之
別也。然れども恕は仁の門なり。この所をよく心得べし。何事もひとへに
さへ心と身もて独と己の心に恕を行ふの自然に至るべし
己所不欲勿施於人と常に志あるべし。恕を
行ふの至り熟すれば自然に仁の域に至る。恕の心に子貢の及ばぬ事なり
るまじく。自然にかくなる事かれはこの所をつとめて爾の及ぶところ
にあらずと宣ひし事なり。恕よりして仁に至る事ならぬにあらず。

まで恕の及ぶところの地となれば、恕の字も仁の字ともに同じく
と又仁にかゝる事なし。然れば此章仁恕生熟の事にありてさす
ことなるべし
一以貫之。又衛霊公の篇孔子告ル子貢ニの語あり。子貢はなほ見えさ
る先儒物をしる子貢の学問をするの学積累の上達へ
ゆかれて見えさるなり。孔子名をよびて賜也以予為多学
而識之者与と宣ふのこと子貢もし然りとおもへり。これ
ともに積学の功にて独る事をしかども見るにあらず。
孔子ふるく孔子非也予一以貫之と宣へり。又内外の至
る事なし。子貢は告る事にて知を以て行ふとまで至
ある故に第四篇まではとりて恕を行ふものにある

傳しかん傳知く行くを以くつらぬることハ曾子にはならしめ
よ君たしの事をくおしふ一貫のことをあり。子貢ふはいはしめん
に多学而識之者のとをしく、終に一貫のことを説あらはさゞるか。
古来学者多く知行の差別ありとし、小註等に見えたる説にもさしてあ
あらはれたる所の事さにあらず。知ハ行をもつてなり行ハ知のことく
あらはるゝものなり子子貢へ示したまふハ何事も知行よろし
くおもしろくなくハし。畢竟一といふハ多ふ対して又貫ハ一以貫之
といふことを多学而識といふにあらさるのことへつゞく徳ハ多子
へ告るも一貫といふことをたゞ一つにしてことに当るかとかくあるあらん。
書経ニも出るとて、古来聖人のそれについてあり。書経
に惟尹躬暨湯咸有一徳と。又曰。徳無常主。協于克一。又曰。

徳惟一。動罔不吉とて其の類あまたなり。何れも物ことを治
一つにしての主路へ示したまふ一以貫之と
いふもまた何をさしても一つに治るなり。又嘗ての
たまはく。攻乎異端斯害也已と。異端ハさまざまのわしれの多
き事を治むもハ害あるとして。孔子ハ一以貫之の道なり。
よくよく義理のことを人よくよく考へて一つに心を寄せてあ
修めてふたつのものあり。それぞれにてきはめて志あるべし。也。
経典ハ学を治むるにも一つにしてふたつにさまよふへからす。
志あるべし。聖門の為に人の為に治るところを忘るる者ハ人則仁
を本とし。仁をとするものに忠恕ならずしてハ成りかたし。
少くも忠恕をよく一貫の旨を発明せしむ。亦あはれ

あらしとや

恭敬　凡九則

恭は集註に致敬やとあり。又莊敬やとあり。又謙遜やとあり。
此大畧の註なり。畢竟人の言語容貌の上に然るべく。今の人の
ことばなりにぬんきんなりと恭といふ。敬は物とたるにかなるべく。お
かまへ物をうく意あり。故に畏敬崇敬なし熟し用ゐ。先儒主
一無適と敬といふの説あれども。甚だ義にあらず
恭敬二字の差別。先儒内外に然るべきことをつかつ。陳北溪字
義に。恭は就見上説。敬は就心上説とし。又二程遺書に云。發於外
者謂之恭。有諸中者謂之敬。孟子告子の篇の集註には
恭者敬之發於外者也。敬者恭之主於中者也とし。此は内

外なひに説なり。然れども論語を考ふるに。君子九思。覓思
恭事思敬とあり。司馬牛の仁を問に。君子敬而無失。与人恭
而有礼とあり。樊遲仁を問に。居処恭。執事敬とあり。志れは
恭敬は内外の差別にあらざるべし。志人し。其上孟子に。恭敬
之心礼之端やとあり。又恭敬者幣之未將者やとし。此も恭
敬は約束にあらざるを上に然るべく。そのことをとして恭敬のん
といふ。もし一ツは心にあり。一ツは事にあるべしならば。孟子に恭敬
之心といふあるなし。恭敬の二字を各々ならべて差別あるべし
志るべし
程子は恭敬の二字を一ツにしてし。恭の字をたて敬のなし説なり
而多し。程子の語に云。今學者敬而不自得。又不安者只是

心生亦是大以致其做事得重此恭而無礼則労也恭者
私為恭之恭也礼者非礼之礼是自然底為理也只恭者不
為自然底為理故不自在也須是恭者安近思録にも是
とのことばこれは礼といふは自然底の為理を云礼儀礼式のことに
あらず致しても自然なるとして浅くろひためろ指なる
成恭者無礼といふと云ことなり又曰君子修己以敬安百姓篤
恭者天下平唯上下一於恭敬則其他自位萬物自育とこそ
論語集註に出せるとのことにこれは天下太平の功を持敬より
あるといふことにて何れも恭敬の二つをとりに後世持敬のこ
とにとらなしたるものなり聖賢の旨にあらず畢竟恭敬
の二つは上に論ずるなりにて。ほしいまゝに少差別あり。

恭者無礼といふは人に對しくいんさんなることはよりこれとなれ
とも人にはそれくに貴賤上下の差別あり。其ならず其人を
手を清き首をさけ平安初徴には又相應の挨拶あり。出れを
礼といふもしひさまのいんさんなるなりこれとしれとひとく家より
下少年初徴なるものへも首をさくるなりこれは苦労しく
もつりし先をとらず。それゆへに恭而無礼則労といへり。恭近於
礼遠恥辱やといふを同じ此ところなり又子夏のことに与人恭而有礼
四海之内皆兄弟やといへり。此詞にていよく分明なり。恭者無礼といふを
不自然の敬といふとこれは恭而有礼を自然の敬といふ事なれや。そこを
ふはなりてし集註に接人以恭而有節文と解せるは註りつとも
明らかなり。然れは恭者無礼といふを不自然の敬といふにあら

さるへしとしるへし。惣別後世にハ。敬を主一無適といひて。学
問肝要の工夫とせられたり。恭を敬と同しくみられけれハ。
經書の内書經などに見えたる欽寅莊肅等の字も。皆持敬の
ことに解せらる。然ど聖人の旨にかなハずと篤恭而天下平といふも。
恭もふかく準しるへし
敬といふハ畏敬奉承の意にて。聖賢の書に所謂敬ハ。
皆事に就ていふ所なり。論語に敬事而信
といひ又敬鬼神而遠之とあり。孟子に敬兄義なりとあり。その外
敬天といひ敬君といひ敬親といひ敬人といふ何れも皆それ〳〵に事ある
ことをさしていへるなり。後しむかしへかハりたる相手なしに一心の上に礼
せねハならぬと敬といふハ。後世持敬の説より出たるものにして。聖人

敬とのたまへる旨にあらす。又礼記哀公問の篇に。敬身といふことあり。
持敬の説者これに拠れり。然れとも本文を考ふるに君子無不敬
也。敬身為大とありて。若親之枝也。敢不敬与とあり。是ハ身ハ父母の
遺体なる故に。父母と大切に保つる事なり。君臣をも兼たり
せねはならぬ所なり。持敬の説にあらす。又論語の修己以敬。仲弓
の居敬而行簡の二語。後世持敬主敬の説に似たれと。能見れは
其子の事も。修己以敬とありて。其下に君子修己以安人
といひ。仲弓も居敬而行簡とありて。其下に以臨其民不亦可
乎とあるなれハ。此二語も民を敬しく兼事にせらることの
佗ハ。ただ不敬を佗めしめてしにあらす。古書に敬といへる
何れも此例なりとしるへし

大学或問に云。敬之一字。聖学之所以成始而成終者也。又
曰。敬者一所之主宰。萬事之根本也。古来にて聖人のと
しへ全く敬の一字に尽きたるなり。是は後世心法の説さんな
なによりてかくあきらしも。聖賢のことばなを考ふるは敬は本
より簡要のことなれども百行の一にしてて。忠信忠恕等は工夫
とぞしなくて行ひたるなりけれど。萬事の工夫は一字に尽きたると
いふにあらず。論語に。道子乗之圏。敬事而信。節用而愛人。
使民以時といへり。又曰。君子有九思。視思明。聴思聰。色思温。
貌思恭。言思忠。事思敬。疑思問。忿思難。見得思義。又大学
に文王のことを述べて。為人君止於仁。為人臣止於敬。為人子
止於孝。為人父止於慈。与國人交止於信といへり。古来

ならべて見るに。仁孝忠信聰明等のことく同しく対偶して一事の
をしへなり。又夫子樊遅の仁を問に居処恭執事敬与人忠とあり。
孟子に四心をあきらく。恭敬之心礼也。惻隠羞悪是非の心と対
配す。彼是同しへ考ふるに。聖学の始終萬事の根本といふことを見
えたり。子乗の章に胡氏曰。凡此数者。又皆以敬為主。九思の章の
註に程子曰。九思各当其一。小註雲峯胡氏曰。事思敬。九思之一。
九思各専其一。則皆主乎敬者也といへり。是皆後人敬我主
とあるの意にて。志ゐてかくあきらしも。本文のとおりけれど
雲強といひ法へし。畢竟上に論ずる通りにて。古へはなを法
しにあらまゆることを敬といへば。かくのごとくなれども。
を後世は心法を専としたく。心を敬礼せざるを敬といふにて。萬

るゆゑにこゝろしいへり。弁さへし
聖門の第一字は仁にあり。恭敬忠恕の類は皆仁をもとむるための
交用工夫なり。夫子の仲弓樊遲に言ふるのことなり。並に孟子有
強恕而行。求仁莫近焉といふの類にて見るべし。古人は人に對
しく如在なく。人のさらをとしさらうく。物にしたるにかくもを。
人を強とうつぬるにようて。かくのごとくなれば。後世仁を性の理と見
らまてるゆへに。かくのごとくされば存る理得と解せらるゝはあらず
さ。此ことさらくに仁の條下にあらせり。大抵聖賢のをしへに本
辨あり。修為あり。仁義礼智は人の所をさしむるの目あらくなり。
是を本体といふ。忠信忠恕恭敬ホの名は何れも修為の名にて。
仁にいたることをもとむるゆゑんの工夫なり。上にあくるところ論孟のこと

なり。古人ゆゑに考へ出るべし。後に大學に仁敬孝慈信と並称する
は各專にさるとこゝろに於ていふ。古人は孟子に仁義忠信とあるを
のごとくなりて。本体修為ゆへあらうことあやゆりといふにあらず。
古人はかくのごとくなれば大學にしく。後世のかくなりたるゆゑにかくなり。
其内大學には仁を專君德として廣く衆人に於てをしへと須
かてし見えたり。此又論あり
先儒持敬の説は。主一無適といふ説あり。整齊嚴肅といふ説あ
り。常惺々法といふ説あり。其心収斂不容一物といふ説あり。何れ
も大學或問に詳に在ことなれば。くりしくいふにはよらず。主一無
適といふは程子の説にて。本は主一之謂敬。無適之謂一といへり。
集註にはまたとなく。主一無適之謂と解せらる。朱子此義

とまでしてしかりへらく。主一只是ん專一。不似他念雜之無適只是不
是作如讀書附只讀書著衣附只著衣了此一件又做一件所在
這裡ん亦在這裡と。何ことにしてもこれを此ことをもとめるとなるのことにんを
ちとさることなり。整齊嚴肅といふを程子の說なり。そのことにふい
りく。只整齊嚴肅則ん便一。一則無非僻之干矣。外面事實の上
に於て敬と持ことをいへつ。常惺々法とは程子門人上蔡謝氏の說
なり。敬只是常惺々法といへつ。惺々とはおろのくらかさること。
常くにんのまゝくさるゆうにせよといふことなり。朱子曰。惺々乃ん
不昏昧之謂。只此便是敬なりといへつ。是ん收斂といふは尹和靖
主一のことを說さたることなり。初寬問如何是主一といふ。尹
氏曰。只收斂此ん便是主一。且如人到神祠致敬時。是ん收斂便著

不得毫髮事。非主一而何ん。諸說かく不同あれとも。畢竟象
一んを收斂しくくらかさるゆうにしてくなり。勿齋陳氏敬の
ちし先敬の成の說あり。西山眞氏內外交養の說あり。是等にて
先傷持敬の旨乃大略をしるべし
持敬の說さまくなれとも。畢竟ひとんをもとんして常々にくら
かさるゆうにしてるの工夫なり。佛家の明ん見性の說に落て。聖人
敬とのなかの旨とはしてなり。朱子曰。學問須是警省。且如
瑞巖和尚每日常自問主人翁惺々否。又自答曰惺々。今時學
者。却不能如此。又或問。佛氏亦有此語。曰是喚醒此ん則同。是為
則矣。若傷喚醒此ん欲他照管許多理。佛氏則是喚醒在此。
無所作為矣。處在此といへつ。此事にくれ。傷者の為を佛家の

ともとあやまるの根ハなるてしなし。たゞ佛氏ハんとれ故なむしろやゝろ
みつくるに意とあるつもし儒家ハんかと故さ殊なくむなふれはあらさるなし
りく淡とよいてしなし。程子云釋氏之學於敬以直内則有之矣義
以方外則未之有也。朱子云禪家則有具衆理而無應萬事以
下来。王陽明の云只説明明徳而不説新民便似佛老く。何も
を雲峯胡氏の所謂有無感滅の説と同じ。みてもふるく。儒佛の
つくもハたゞ用の上にあるくん。術の工夫至極のところにいたるくハ
異なしと見える。是も皆宋以来諸儒妙園の旨儒中に混しつゝ
へるにようくあるのかれの分疏あり。聖人のをしへにしたがふるの
まれてなし
人々ハ二用をへうく深く又へるとるにゝる人ハまく一とし〜に志なく

孝ハしあつだにハ君命と争ふく大切の用とはれどもんとふかつり
父母の喪とれしきまし。何事とまし何事とまけてとこふある
をめくのちしれのにし。先儒の説ニ経を経とつろく行てしてよつし経
をしをしてしゆるして八経を重とをくるとつくしをあろくてさる
権といふにハ字を無ハ志めくろとし。又重とよのして大学の正ん
よの一工夫有をそしなり。重とよのしれへ。ゐるとをまとしてゑ
何よんでとちくとるてし。正んとよの八。ゐるとまぬく他のとれ
覚せざるとといふまし。しろなりハ。此二字専ら一めるを皆んとま
時のんしくまし世しもころふなろくめくのちしれの事ひお系つこ
とあり。想動の揚ふ無さるハ目の揚とりくろめとし。てもとまとし
てりんまもとを大抵左右のをれあつるハりん由つるをのあり。経をもとをと

とれところ陽ていはんえさ。心をもつ通りにしく。讀書ハ書をもと
して。食をくらふハ食をもとしてしかるとも。その内に他の
ことにあつかうにあらさ。又前にふるてし。至つに弁へ志るも
くるしかはしれにもあらず。正心の説の通りなるハ前に称るの
おし。おく弁へ志るへしとなり。至一の説なるハ。つるをもとして。
二用をへかしかはとなり。おもハ何をもなりかたれてしにや。聖人君
をへハ。さて若と同あくとしたるとのうとして。心のそ方にさらる招
に示しるなり。志於ハ依於仁といふの類。何をもそるなり。二用をへ
らかといふにもあらず。又ひろく弟子に意をつさにもあらず。

權　九七則

撞といふハ。稱錘やし註を。等子のとゝりのことなり。物の輕重なり

志さうつく。前へ出せ後へ出せてくよさ取へとくそのなり。權弦後知
輕重とおもなり。おもにかうてく。定りたる礼法の法へあるとれり。
おもをとへてたるまかなふやうにおもるを撞ハ。それ少へ孟子に
を撞と云て礼に對してくとなり。後世ハ物に作畧計謀あるを撞
變撞謀といふハ。かり用ひたるものにて。正義にあらず。又撞ハ反經合
ハ。といふ説あり。或ハ撞ハ聖人にあらさるハ行ふ事なり。何を
も古聖賢のことにあらず。弁論なりんハあるへしと
程子曰。漢傷以反經合為權。故有撞變權術之論。皆非也。撞
只是經也。程子の漢傷を非とせらるゝことにしたりなり。此ハ
羊傳におもく。魏の何晏晉の韓康伯のしかうにおもとれるなり。公羊
傳莊公二十一年に。鄭人鄭の大史祭仲を執へてく。曰為家ハ忽而

納実と。条仲をこと。然るに従ひたるとれば。若必死国必亡。それ故
こく。忽をおしこく実を納る。公羊ある故とへらく。古人の有権者。条
仲を権也。権者何。権者反於経。然後有善者也。反経の
説ありしかたく。変にいつ。易の系辞に。巽以行権といへり。韓康伯が註
に。権反経而合於所必合於巽順。而後可以行権也。又論語子罕の
篇に。唐棣之華。偏其反而。何晏註。華反而合。賦此詩者。以言権反
反而後至於大順といへり。程子の漫傷といへるは。此等の説をさす。
論語古本は。唐棣の章。前章の未可与権といふと連て一章たる
ものなりて。偏其反而といふの語はなくしてもいへり。然れども経
は前世不易の常なれば。経に反しくなるはあるまじ。
程子の説。尤信用すべし

程子の説。彼とは未しかりなりと。然れども権は即経也といふとれば
経権の差別なし。朱子集註に。孟子嫂溺の義を以てとせし時は。
経と権と差別あるべしといへり。又程子権濟経を所不及といふ説
あり。此等のこと。朱子語類にさなくし議論あり。畢竟先傷は。
経と権と対しなく。経権といふべしといへり。孟子にしたれば男女授受不
親礼也。嫂溺援之以手者権也とあり。然れば権は淳さに礼義
以て対すべくして。経を以て対すべからず。経を取不及と
あるも。尤れとへてること。なれども。まづ経を以て対するの意
あり。的当の説にあらず

集註に洪慶善の説をあまりて云。権者聖人之大用。未能言
言権。於人未能言欲行鮮不作矣。又朱子語類に云。経与底

人与学者皆能循之至於権則非聖賢不能行也といふ意ハ
権といふものハ聖人分上のことなれバ賢者以下ハ行ひがたし
なりがたきといふ聖人の心をよく考へて権を行ふべきと大切
なること聊も私なく行ふべからずといふハ聖人ならでハ
行ひがたきといふことなり先儒の意ハ常底の人ハ権を行へ
とゆるさゞれハ常道を破るのおそれあるゆへなり
多けれバなり かくいへり 朱子曰経是萬世不易之常権是不
得已而用之如湯放桀武王伐紂伊尹放太甲此是権也若日々
時々用之則成甚世界了といへり経ハ常底の人と
てもよくまもるべし権を行ふべきにあらずしてあつたら人ハ聖
賢のくらゐと用ひがたく古今にまれなり論語集註云

名医にあらざれハ加減をなす事なしといへるハ何ぞや孟子曰執
中無権猶執一也といへるハ能く気血をはかりてのむ事なれバ聖人
分上にあらざれハ行ひがたきといふにあらず
論語可与立未可与権といへり学者ハ人道の上に踏ての次第
あるべし可与学といふより可与適道といふハ得がたく可与適道より
いふより可与立といふハ猶得がたく可与立といふよりも可与権
といふハいよ〳〵得がたしといひて其次第ある人ハ世にまれ
なるべきなり常に権を用ゆるにハあらずして必道義識ある人に
あらざれハ行ひがたしといふことなく聖人にあらざれハ行ふべからずと
いふことにあらず既に先儒も是に合せて既に道を論せず
して権を行ふべきなれバあやまち多しといへるハ一「槩」なるものなり。

たとへハ男女不授受ハ礼や。是人の事して行ふことなり。かし嫂
溺るゝ者。聖人の法あらはしいつく。立所まで溺れを見たくも
くわまんハ人乃先ならふ。此事ふよりて常礼を変して権を
行ふて此事を救ふ。他事の上まをしてを用ひ礼ことなり。聖人
権を用ひのこと。是ふて考へ志るへし
常礼を変しく権を行ふハ。たとへハ常に往来し法あるを
熟路まさりあるとれ。ことさらへまわりて先へゆくことし。熟
路まさりてさりさへなくハ聖人何のゐふ。此事をかへてこれ
乃へ知るんや。けさ乃へ知ることハ先の志を取へいてうさりふよりて。
権を行ふなり。けれ聖人まあらはしいつくけさへ知ハ乃ま
いることなし。然れとも此事を行ふの物。軽重大小のけるを

けさはふしたやもかさるふよりて。未可与権といふなり。たとへハ
三年の喪ハ天下の達禮や。然れとも軍旅之事ハ不辞といふさ
ことふハ喪をもかなりといつることなり。又少くの寇ふなり。
爲れことふをあらはす。又少くのことくとも。国家の大事ハ顧
ましなれハ又いつへし。かやうのことあむつかしれなり。然るゆへまその
人をかたんしく。未可与権といふ事。故謂権非不可行也。
行権之難
湯武の放伐。伊尹の放大甲ことを。朱子此事を権といへり。此説
諸孟字義ふ非しく。此とへらく。伊尹の大甲を放ハ権といふ事。
湯武の放伐ハ乃といふ事し。権といへりしく。讀者多く疑ひを
なしく。湯武のことを乃といふ事ハしといへり。是ハ湯武伊尹とも

ふ。君は分上まありくゝ見るふようにて。出来を撞ひといふ。出来は後こ
とふことゝりなり。結果とも如くのことく見るとれハ。又何とも成
あやまりことあり。何そ出来ハ。君といふものハ。やまひさつとこゝく。
かりそめふもとろそかふせさるものなり。結るふ出来を廃して
去れまうけしをくハ常々恭敬の礼をさうひさるふようにて。出来
を撞といふ事しんよ如在をなく如をへとも如くのことくせさ事を。
たちまちに國天下をほろかさるにようにて。いさめのさゝんを志す
くさつしをく。伊尹の大甲につかふ。まつる気なり。結る沙人は君相
三年居仁遷義あやまちを改めるくふをよひてハ。是ハ遠
まりて。位を如へし國家を相續せ。始終伊尹と大甲と。君は
のちなくたへとして放廃せるふようにて。気を撞といふ。湯武のこ

ハ出来ことなり。先君といふものハ。武を安さるを君と云。諸侯ハ
一國を安んし天子ハ天下を安さるを君と云。諸侯ふくし一國を
安んせさ事ハ。天子より出来を對せらる。諸侯ふあらず。天子ハ
天下を治ることあたはず。夏の桀殷の紂のことく。悪逆無道にし
て。賢人の肝をされ。孕婦の腹をさくかことくなるものとし。天下の
人民日いつか亡しのろひ祈うふことくなるふいたりくハ。天下の君
といふものふあらず。これ物を易るふ。桀ハ狙ハ禹なり。紂ハ狙ハ成
湯なり。何事も世の天子まあらず。仁聖の徳なくて。天下の人民
あつさ志すまうらく。天子となりて。天下をたもちなるふ。結る
とれハ。後世の子孫。悪逆無道にしく天下の害となり。萬民ハ地も
ひさなさるにいたりくハ。天下の君まあらず。獨夫といふものなり。故

又孟子にいはく。聞誅一夫紂矣。未聞弑君也といへるハ是がためなり。
孟子の此語湯武の事を大に書るにて君臣の名義をまもらざるにあら
ず。乃自若くたるべし。強まへ湯武の放伐ハ君臣の恩義たへかたき人
にあらず仁を以て至不仁をうつといふとも君臣ハ天下のためにやむ事をえずして。
捨べきへかへり次第に法令とるにつけて明なる事を捨て人臣として
君を伐をさしいふ事まさるにあらざる道を捨ずして又聖人にあらざ
れハ捨を行へ道理を立ていふ。其数の道のふかく君父につきもあり
れらざれバよろしく聖人のあつて是をくるしめ次しれ君を
以て名あり上何れもあしれらくおそらくるし此次しいふとく
あるべきや。又昔聖人の事を以てするべし。此らハ人をおそれし。是
皆君臣の分上ふかく論せずしてまさる此人はむかしのことくに其所行

る事へは少しにくきを君たる人にふかくあつく君臣のよろしき也
ひとつにそれハおのれをとらへしはしハ甚だしき害あるがゆへに
捨よといふ事ハ湯の桀を放ち武王の紂を伐をとがむるにもあらず
事を行くはかく不待のあらず時を伐く羅勢れみちたる上不
得已して其事を伐しくれバ君臣の道にかなふへきなり

刻幼字義卷之四終